
聖竜の姫巫女?

ルシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖竜の姫巫女？

【Nコード】

N4576Z

【作者名】

ルシア

【あらすじ】

今から約七年前、突如飛空艇に攫われたアイリを探すシンクノアだったが、彼女は実はく地の崖で国>(パラドキア)という場所へ連れてこられていた。王に次ぐ地位にあると聞いていい竜騎士のファルークに求められるアイリだったが、彼女は今も幼馴染みであるシンクノアのことを想っていた……。一方、そのような到底自分の手が届かぬ場所にアイリがいると知らないシンクノアは、ルークやセシルといった仲間とともに旅を続けるのだったが、彼はいつか彼女に会うことが出来るのだろうか？

第1章 天空の島の美姫

＜地の崖ての国＞の上空には、アストラ・オータ天空島と呼ばれる城砦都市が聳えていた。

天空島は東西15エリオン、南北15エリオン（1エリオンは約1km）ほどの小さな島で、パロドキアと呼ばれるこの世界の地の崖て。その見渡す限り岩石しかない痩せた茶色い土地だけを移動していた。とりあえず、今のところは。

地の崖てに住む民たちは、自分たちの土地を＜地の崖て＞（パロドキア）と呼ぶのに対し、聖ルシアス王国を中心とした他民族の跋扈する世界を＜中央世界＞（エルシオン）と呼んでいる。またそこに住む人々のことを「人間族」とか「人族」と呼び、自分たちのことは「竜族」、あるいは「竜族の末裔」と呼んだ。

ここでひとつ、今から千年以上も昔の、ある伝説にまつわる物語を語らなければならぬだろうか。

吟遊詩人もよく歌に歌っているとおり、この世界が誕生した時（ということとは、それは千年どころでなく、実際にはさらに大昔ということだが）、最初この世界には神と大いなる闇しか存在してはいなかった。

そして、神が「光よ、あれ！」と言った時、この世界に誕生したのが光の女神ルシアであった。創造主である神は、最初から自分とともにあった闇よりも、この光のほうをより愛した。そのことに反発心を感じたく闇は、自分も神の真似事をして、創造の業をなすようになったという。

すなわち、神が自分の伴侶のような存在ともいえる、光の女神ルシアと海を創り、大地を創り、鑄た鏡のような天空を創り、大地に萌える若草を育み、やがて動物や人間といった生き物を誕生させるのを、＜大いなる闇＞は暫くの間、ただ黙って見ていた。神が光の女神ルシアと創造の御業をひとつ行つたたび、＜闇＞が世界を支配す

る領域は狭まっつていったが、<闇>は最初、そのことを忌々しいと感じながらもただ静観していたのだ。

だが、創造神と光の女神が「人間」という存在を形作り、創造主である自分と光の女神を覚えて讃美させようとした時　　<大いなる闇>はその賞讃すべき対象の中に自分が入れられていないことを知り、初めて怒りに身を震わせたのである。

こうして、<大いなる闇>は己を賞讃する存在を欲し、創造神の真似事をして、自分もまた「人間」に匹敵する存在、いや、人間以上の存在を誕生させようと考え、まずは闇の女神アシエラを光の女神ルシアに匹敵する存在として生みだした。

そしてアシエラが自分の伴侶を欲すると、彼女の胎内から闇の神が生まれた。アシエラは彼を「わたしの血肉からの男」と呼び、自分の伴侶にアルゴルと名づけたのである。

ところで、世界の中心と^{エルシオン}呼ばれる場所に創造神と光の女神が人を住まわせ始めた頃　　世界の崖てにある場所は不毛の土地と考えられており、未だ火山活動が活発な岩山が聳え立っていた。<大いなる闇>はそこにアシエラとアルゴルを住まわせると、彼らが「人間」よりも強大な種族を生みだすようにさせた。

すなわち、それこそが「竜族」と呼ばれる人々である。<大いなる闇>は、その前に世界の崖てにある闇の底から暗黒竜が昇って来られるようにし、「竜族」にその竜を操る技を伝授したという。

闇の女神アシエラは光の女神を憎み、暗黒竜によって何度となく攻撃を試みたが、その度に光の竜ルシアスがこれを撃退した。アシエラが悔し涙を流すのを可哀想に思ったアルゴルは、彼女とともに最初は二つの頭部がある竜を創造し、それがルシアスによって破れると、今度は三つ頭のある竜を、それもまたルシアスによって殺害されると、次は四つ頭の竜、五つ頭の竜、六つ頭の竜……そして最後には九つ頭のある巨大な魔力を持つドラゴンによって、ルシアスがこれと戦うよう仕向けた。

闇の軍勢どもの執拗な攻撃に、流石のルシアスも深手を負った。

九つ頭のヒュドラと呼ばれる竜もまた、ルシアスに頭を八つ噛み干切られた形でほうほうの体により逃げ去った。

この時、ルシアスは自身の名を冠したルシアス島という小さな島まで行き（この島は今も、ロンディーガ王国の南西にある）、そこにある洞で体中に負った怪我を回復させようとした。何故といってヒュドラが地脈の濃い地で羽を休ませ、傷が癒え次第再び襲つてくるといふことが、彼にはよくわかっていたからである。

だが、ルシアスの体は弱りきっていた。その無限とも思われた体力の消耗は激しく、いまや虫の息にも等しかった。そして人間の目には不死と見えていたルシアスがその命の灯火を消そうかという時、竜の洞にルーシュという名の人間が現われたのである。

彼女は十弦の竖琴により、ルシアスの心を慰め、さらにはエリクシアルと呼ばれる樹木の葉から霊能薬を作りだし、それによってヒュドラから受けた傷により、壊死しつつあるルシアスの骨や筋肉を回復させたといふ。

その後、ルシアスは見事ヒュドラを完全に撃退せしめたが、十の頭を持つ竜が再びエルシオンを脅かすということとはなかった。何故なら、創造主である神がそれ以上の両者の戦いを決して許そうとはしなかったからである。

地上に再び平和が戻ると、ルシアスは光の女神ルシアに人間になることを願い求めたといふ。ルシアは、自分や世界そのものを盾となつて守つてくれたルシアスに対し、その褒美として彼に人間になることを許した。

こうしてルシアスはひとりの人間の男になると、ルーシュを妻に迎えて中央世界の最初の王となった。すなわち、これがルシアス王国の建国伝説なのであるが、聖竜ルシアスが竜から人間になろうといふ時、竜としての力は七つのものに分化したと言われている。つまり、ひとつは剣、ひとつは槍、ひとつは杯、ひとつは指輪、ひとつは盾、ひとつは兜、ひとつは鎧である。

これらのはちにく七つの聖鍵く、あるいは聖竜の秘宝と呼ばれる

ようになり、暗黒の軍勢の目より逃れて世界各地へ隠匿されるようになったのだが、そのようなものが「今も真実、本当にある」と信じている人間というのは、おそらく稀であろう。

ただし、これは<地の崖てに住む民>を除いた、中央世界の人間の中では、という意味であり、<地の崖てに住む民>はみな、現在もそのようなものが間違ひなく世界のどこかに存在しているということ、よく知っていたのである。

嗚呼、我が魂は熱く燃え

そなたの肉体と心とを、この上もなく切に求めて喘ぐ

そなたの清らかな心の一滴

それが得られたならば、我が持つすべてを投げだすものを

だが、我は竜

恋しいそなたは人間の娘

誰がこの境界を越えられようか

また誰がこの熱い血のたぎりを沈めえようか

嗚呼、我が魂は熱く燃え

そなたの肉体と心とを、この上もなく切に求めて喘ぐ

嗚呼、我はそなたの奏でる琴の一弦になりたい

あるいは、そなたが手を浸す清らかな泉の水の一滴にでも

だが、もしそれすらも叶わぬというのなら

この体などあのおぞましい暗黒竜にでもくれてやろう

ただ、そなたの愛

それが得られるというのなら、我は再び力を盛り返し

たとえこの身が滅ぶことになるうとも、ヒュドラを撲滅せんと立ち上がるうものを

このあと、聖竜ルシアスの愛の告白を受けて、人間の娘ルーシユの美しいアリアが歌われることになるのだが、パラドキアの歌姫と呼ばれるアイリは、そこでふと、豎琴を奏でる手を止めた。

<奏楽の間>と呼ばれる城の一室で、彼女は窓から遠く今も古代の竜がその火口に眠ると言い伝えられるネイティーン山を見やった。もつとも、天空の島が空を移動し、火口の上空を通過する際、そこを覗き見たとしても 灼熱の赤いマグマ溜まりが見えるという以外、他には何も無いということアイリは知っている。

自分をここへ連れてきた、アシランズという竜の片眼を持つ男が、そう教えてくれたのである。

「これもまた、言い伝えられるところでは、ということだが……その昔の昔は、本物の竜というのは、我々が今飼っている竜などより遥かに大きかったということだ。だが、人に飼い慣らされるうちに自然、千年もの時をかけて竜は小さくなっていき、また卵をなかなか産まなくなつた。これがどうということだか、寒村の田舎娘にはわかるかね？」

アイリは、自分の声で答えるかわりに、ポロン……とリユートの弦を爪弾き、疑問の音色をその時彼に返した。この<世界の崖>及び、パラドキアという場所へアイリが連れて来られたのは、今より七年前 十六歳の時のことになる。

以来、天空島と呼ばれる城砦都市の高い塔の一室へ閉じこめられ、時折豎琴を爪弾いたり、歌を歌って過ごすという他に、彼女にはなんの役目も責務も負わされはしなかった。

『アイリ、アイリーっ！！どこへ行くんだよおっ！！俺を置いて

いくなよーっ!!』

星月夜の祭りの夜、そう叫びながら、最後まで自分のことを追ってきた少年のことを、アイリは今もまざまざと瞼に思い浮かべることが出来る。だが、飛空艇は無常にも、万年雪を頂く白竜山脈の彼方へと、今しも飛び去ろうという頃だった。

『シンクっ……!!あたし、あんたを置いていくんじゃないわっ!!必ず戻ってくるから、絶対に待っててっ!!』

飛空艇の甲板から地上へ飛びおるには、すでにもう危険すぎるほどの高さがあった。だがもし、魔法の力による見えない壁さえなかつたなら、アイリはおそらく重傷を負うことも顧みず、その時そこから身を投げだしていたかもしれない。

それも自分のため、というよりは……他でもないシンクノアという名の、真紅の瞳をした少年のために。彼はイツファロ王国の言葉、イツファノ語で言うところのマザル＝マゴク<忌み子>と呼ばれる子として生まれた。マザルというのは、第13の月の意味で、マゴクというのは呪われた子、あるいは畸形児を意味する言葉である。

アイリは生まれた時から白竜山脈に抱かれた麓の寒村　イツァーク村から外へ出たということがない。もちろん近隣の村々や一番近い場所にある大きな町へなら、出かけたことがあるにしても、他の聖五大陸の人々の暮らしなどについては、噂話や物語として聞く以外、本当のことを何ひとつ知らずに育った。

だから彼女は、第13の月に赤い瞳の子が生まれると、他の国の人々もその子を<忌み子>、呪われし子として捨てる風習があるのかどうかかわからない。初めて村外れに住む、「イツァーク村きつての奇天烈ばあさん」と呼ばれるマリサの丸太小屋を訪ねた時、アイリはまだ五つだった。ふたつ年上の姉、ライリが熱をだし、薬草師のマリサの元まで薬を受けとりに行くことになったのだ。

父は町であつた集会に参加する用があり、母は高熱をだすライリにかかりきりで、薬を受け取りにいけるとしたら、たった五つのアイリ以外、他には誰もいなかったのである。

「このユートニップの根を煎じたものは、熱によく効くからね。なに、明日の朝にでもなればきつと、熱も下がって落ち着くだろうよ。それから、シンク。ぼさつとしてないでおまえ、この可愛いお嬢さんを送ってっやおやりよ」

アイリは、近所の子供たちがみなマリサを「魔女」と呼んでいるのを知っていたし、シンクノアのことを魔女の子だと信じて疑っていないのを知っていた。そしてみな「血のように赤い眼をした魔女の子」と呼ぶ子に初めて会い、彼女が感じたことといえば「ただ純粹に驚いたという、それだけだった。」

「あら、あんたの目玉つてば、うさぎの赤いのにそっくりね！」

色々な動物の骨やら、干し魚や干し肉、薬草類が丸太の垂木からぶら下がる部屋で、その時シンクノアは砥石で包丁を砥いでいるところだった。炉辺の敷物に座ったまま、シュツシュツといつまでも永遠にそうしているのではないかとアイリには思えたけれど、アイリのことを振り返った彼の顔は、どこかぼかんとしたような、不思議そうな感じだったのを彼女はよく覚えている。

「マリサ。俺、包丁とんだよ」と、シンクノアは鼻の下をこすりながら言った。

「あいよ。まあ、いい出来映えだね。明日はこいつで、鹿肉の燻製作りでもしようかね」

「俺、煙を燻すの手伝ってやるよ、マリサ」

「そりゃそうだともね。他に一体誰がいるんだい？まさかこの年寄りひとりに冬支度のすべてを賄わせようなんてんじゃないだろ。この家に住むのはあんたとあたしのふたりきり。ふたり分の食い扶持は、ふたりでなんとかしないとね」

この時アイリは、シンクノアとマリサのやりとりを見ていて、思わずくすくす笑いださずにはいらなかった。もし今、窓から村一番のおしゃべりと評判の、エルナばあさんが外から見ていたらどうだろう。おそらく彼女はマリサとシンクノアが包丁をためつすがめつじつと眺め、人を呪い殺す算段をしているとも思いこんだの

ではないだろうか？

「なんだ、おまえ。一体何がそんなにおかしいんだ？」

馬鹿にされた、と思ったのかどうか、シンクノアがムツとした顔をしてアイリのほうを睨んだ。その瞬間、すっかり忘れていた姉のライリのことを思いだし、アイリは少し罰の悪いような気持ちになった。

何故と違って、アイリは一間しかないその居心地のいい部屋にまだいたかったし、この自分と同じくらいの年の子と色々話してみたかった。けれども今は、ユーニップの根を刻んだ熱冷ましの薬を、一刻も早く家まで持って帰らねばならない。

「いいから、ほら、シンク。早く外へ行く支度をおし。そしてこの可愛いお嬢さんを見どり川にかかる丸太橋のあたりまで送ってつてやるんだよ」

「……………」

シンクは返事をしなかったけれど、それでものろとした動作で壁の木釘にかかっている毛皮の外套を手にとって着ていた。その時、アイリには彼にとってマリサの命令というのは絶対なのだろうということが、なんとなくわかった。

自分も、冬に外の厠へ行く時や、その他家の用事を足すのに納屋を出入りする時なんかによく今のシンクのような気持ちになることがある。納屋に獣油をとりいき、ランプにそれを足すのは面倒だけど、かといって親の言いつけに従わないわけにもいかないのだ。

「あんたって面白いわね。あたし、明日もまたここに来て、あんたやマリサが鹿肉の燻製を作ったりするの、見てもいい？」

「おまえんち、そんなに暇なのか？」

アイリが両手に白い息を吐きかけていると、シンクは相変わらずぶっきらぼうな口調でそう聞いた。

「べつに、暇ってわけじゃないけど」と、アイリも少しムツとして言った。「家の用事が済んだら、近くの子たちと遊んでもいいって

ことになってるの。だからあたし、明日もここへ来るわ」

「ふうん。じゃあ、好きにすれば？」

そのあと、随分長い間会話が途切れた。イツアーク村の九月は、すでに冬の足音の聴こえる寒さで、<？（ラゼル）の刻>ともなれば、じんとする冷たさが子供の耳朶を痺れさせた。

それでもシンクはみどり川の丸太橋のところまでと言わず、アイリのことを家の庭が見える近くまで送っていつてくれたのだ。ルエルナと呼ばれる金の月は半月で、ルエルガと呼ばれる鈍色がかつた銀の月もまた同じように半月だった。そしてこの双子のような月が、落ち葉の香る森を不思議な青さで照らしだす中を……ふたりの子供は影を重ね合わせるようにして歩いていったのだった。

この時のことを思いだすたび、アイリは今も少し不思議な気持ちになる。言葉がなくてもお互い特に窮屈でもなく、体は寒いはずなのに、心は何故か温かいという、いわく言葉ではうまく言い表せない気持ちだった。

そしてこのことはおそらく シンクノアも同じだろうとアイリは確信しているのだけれど、アイリにとっても世界は、この時からふたつしか存在しなかった。つまり、シンクノアと共にいる世界と、それ以外の人と一緒にいる世界ということだ。

アイリの両親は当然、村外れの気違いババアと呼ばれることすらある、マリサとその養い子との交際を快く思わなかったし、そのことは同じ村の人々の眉をひそめさせ、子供たちにはアイリをからかう絶好の囃し言葉ともなった。

「赤い瞳のマザル」マゴク、青い瞳の子と結婚し、子供が出来たらお目々は何いろ？」

学校の先生や親たちは、自分の教え子や子供たちがそう囃し立てるのを聞かたび、「これっ！」「とか」「こらっ！」「と言って叱りつけはしたものの、それと同時に何故アイリが わざわざ村の外れ者と好んで交際しようというのか、理解できないかと思っっていることが、その眼差しからは見てとれた。

「ねえ、どうしてマリサのお家に行っちゃいけないの？マリサはライリの命の恩人なんだよ？もしあの時熱冷ましのお薬がなかったら、危険だったかもしれないって、お医者さんも言ってたでしょ？それなのに、なんで？」

アイリはよくそう言っっては、母親のことを困らせたものだったけれど、結局最後は姉のライリの協力を得て、アイリはシンクノアと一緒に森の中で遊ぶという道を選ぶ。まだ幼かったせいもあり、マリサがルシア神への信仰を告白していないということが、何故それほど重大なのか、アイリには理解し難かったのかもしれない。

イツファノ民族は、その国土に住む約9割以上の人がルシア正教を信じていると言われている。つまり、光の女神ルシアが創造主であられる全能の神と創造の業を終えて休んだといわれる聖日曜日には、人々は必ず教会へ礼拝をしに訪れるのである。簡単にいうとすれば、小さな農村社会では、同じ宗教・信仰心を持たぬ者は除け者にされる運命であり、マリサがもし光の女神ルシアを信じていないというのであれば、他に一体どんな神を信じているのかという、その部分が田舎の信心深い人々の間では問題となるのであった。「あたしはね、そりや信仰心のほうは持つてるともね」と、マリサはよく香草や薬草をより分けながら、アイリに教えてくれたものだった。「だけど毎週毎週、同じ顔ぶれのいる場所へ、お参りになんか行きたくないのさ。それよりは、神のお創りくだされた森の自然のお堂へ行ってお祈りしたいもんだと思うね。でもまあ、村の連中はあたしがそんなことをしてるのを見れば、やれ邪教と通じてるか、やれ闇の神を信奉しているだのと言うのだからよ。けどまあ…それでもね、シンクノアのお目々がこんなに赤くもなけりゃあ、あたしも子供のことを思って教会へ行つたか知れないね。でも、シンクを穢れた悪魔の子だのという連中がいる以上、あんなところはむしろ、あたしのほうが用なんてないのさ」

この時シンクノアは、確か七つくらいだっただろうか。リキエル

という名前の、筋骨たくましい流れ者の剣士が現われる前だから

おそらくそのくらいだろうと、アイリは漠然と思いだす。自分とシンクが五つから七つくらいになる約二年ほどの間、アイリは自分のどこからどこまでがシンクで、シンクの一体どこからどこまでが自分なのか、まるでわからないような曖昧模糊とした一体感を彼と持っていた気がする。

お互い、言葉などそれほど多く使わずとも、何をしたいか何を言いたいのか、口を使って言う以前にわかるくらいの親密さがあった。だが、ただひとつだけアイリにとってシンクが理解出来ないとすれば、彼が包丁を問わずナイフを問わず、刃物というものに対して、異常なほどの執着心を持っているということだっただろうか。

彼はそれで、命ある動物たちを何匹も殺した。もちろん生活のため、糧食とするため、必要最低限の犠牲として、野うさぎを狩ったり鹿狩りをするのだとしても、シンクノアは本当に生まれながらの狩人であるように、アイリには感じられてならなかった。彼は牛や豚といった家畜を屠殺する時にも、一発で急所を殴って気絶させ、なんの恐怖もためらいもなく、マリサの指示どおりにその腹部を裂いていったものだった。

「あの野童の坊主は、なかなか見どころがあるな」

そう言って、マリサの丸太小屋の脇にある納屋へ、リキエルという男が住みつくようになったのは、アイリやシンクノアが八つになるかならないかという頃だった。アイリの誕生日は第六エゼルの月のことで、シンクノアの誕生日が第13（マザル）の月、ということは正確にはアイリがすでに八つで、シンクノアはまだ七つだったということになる。

その年の収穫月を迎える前の短い夏に、放浪の剣士を名乗る男は現われ、すべてを滅茶苦茶にしまった。もつとも、「すべてを滅茶苦茶にした」と言っても、それはあくまでアイリひとりの個人的な気持ちとしてそうだった、ということである。

実際にはシンクノアは、リキエルがまるで自分の持ち得ないすべ

てを持つ偉大な人物であるかのように彼を慕い、彼に懐き……リキエルから剣術の手ほどきを受けるようになる頃には、せっかくあった自分との一体感から急速に離れてしまったのだ。とにかく当時のアイリには、そう思われてならなかった。

正直なところをいって、アイリはこのリキエルという名の精悍な顔つきをした男のことが好きになれなかった。もしかしたら少し、憎んでさえいたかもれない。

アイリには学校があったし、そちらの世界での友達というのもなくさんいた。だから、人からとやこう言われないために、この機会にシンクノアから離れる……そういう道も確かにあったには違いない。

だが、アイリはシンクノアがするりと水のように手を離して去っていったことにいつまでも執着し続けた。おかしい例えになるけれど、それはアイリが生まれて初めて持った大切な人形を焼き捨てなければいけないという、そうした選択に似ていたかもれない。人形が焼かれる間、自分には感じていないはずの炎を感じ、涙を流して悲しむだろう、そしてそんなことをした人間のことを激しく憎まずにはいられないだろう……それに似た思いをもって、アイリはリキエルという得体の知れない男のことを眺め、出来る限り彼のない場所でシンクとふたりきりで会うということにした。

もっとも、シンクノアとしてみれば、自分が好きな相手を何故アイリが同じように好きになれないのか、理解できなかったようだけれど、なんにしても最後には、アイリがシンクノアとマリサだけが好きなのであって、リキエルという男と一緒に話にはあまり話をしたくない……そうアイリが思っていることを、シンクノアもようやく理解したのだった。

今にして思うと少し不思議なのは、マリサとリキエルがどうも古い知りあいだったらしいということだろうか。そしてそもそもマリサは、イツアーク村の出身者ではなく、いつの間にか流れ者として白竜山脈の麓に住みついてたという女性だったのである。

銀髪に灰色の瞳をしたマリサと、黒髪に赤い瞳のシンクノア、オレンジブラウンの髪に鳶色の瞳をしたリキエル……この三人が同じ食卓で笑いあっているのを見ると、アイリはいつも奇妙な感じがしたものだ。この三人の間には、どう考えても血縁関係などないはずなのに、何故かまったく同じ匂いのようなものをアイリはよく感じていたからだ。そして自分はそこでは部外者であるように感じられること、そのことがアイリには漠然とつらかったのかもしれない。

なんにしても、それからアイリが十五になるまでの間、リキエルはイツァーク村に居続けた。種蒔きや作付けといった野良仕事はもちろんのこと、穀物の運搬作業といった力仕事に至るまで、彼は「ちよつとした手伝い」のようなことをしては、どんどん村の人々から好かれていった。というのも、その後シンクの性格がどこかお調子者的になつていったのは、間違いなくリキエルの影響だろうとアイリは思っている……彼は冗談を言ったり軽口を叩いたりするのが好きで、そんなふうにしてすぐに誰のことをも魅了してしまうのだ。おそらくリキエルのいた七年の間、イツァーク村で彼に敵意のよくなものをしつこく持ち続けたのは、アイリひとりくらいのものでつたろう。そしてアイリ自身にしても、ただひとつの事柄に関してだけは、彼に感謝しなくてはならないことがある。

リキエルはいつも楽しそうに口笛を吹いたり、歌を歌ったりしているような男で、聖五大陸の色々な流行り歌を実によく知っていた。その上声も伸びやかでとても良く、リキエルが色々と言葉の音のほどこきをしてくれたことに対しては、アイリは掛け値なしに彼に感謝しなければならぬかもしれない。謝しなればならないかもしれない。

（でもまさか、そんなことのためにく世界の崖でくなんていう場所へ来ることになるとは、流石のリキエルさんにも、想像つかないことだったでしょうね）

リキエルがイツァーク村を去って間もなく、マリサが亡くなった。そしてその痛手がシンクノアにとって十分癒えないうちに……今度

は自分が、突然得体の知れない何者かにさらわれるということになったのだ。

そのことを思うと今も アイリは時々切なくてたまらない気持ちになることがある。もちろん、あれからすでもう七年という時間が過ぎた。おそらくシンクノアは今ももうイツァーク村にはいないだろうと、アイリはそう確信している。何故といえ、ああした小さな農村社会ではシンクノアは自分の土地を持つことも出来なければ、家庭を持つことも叶わないままだからだ。

それに彼は昔からよくこう言っていたことがある。「世界のどこかを探せば、目の色が何色だろうと、髪の色や肌の色がなんだろうと、差別のない国つてのがあるかもしれない。俺はいつかそういう国を探しに、冒険の旅へ出るんだ」と……そして、そのく冒険の旅にシンクノアが旅立ったであろうことは想像に難くない。

そしてその旅の過程で 彼の目の色が何色だろうと構わず、心から愛してくれる人と出会ってすでに結婚しているかもしれないし、実際シンクノアが言っていたとおり、瞳の色が何色でも髪の色や肌の色がなんだろうと差別のない場所で、彼は幸せに暮らしているのかもしれない。いや、むしろそうであって欲しいと、アイリはそう望んでもいた。

それから最後に……ほんの少しだけ馬鹿な夢を見る。シンクノアが突然いなくなった自分の行方を探し、このく地の崖へと呼ばれる場所まで、自分を迎えに来てくれるという夢だ。実際、アイリはそんな夢をここパラドキアにある自分の寝室で、何度か見たことがある。そして目が覚めたあとには、必ず涙が頬を伝って流れた。

(もしもリキエル、あなたにもう一度会うことがあったとすれば わたしは恨み言を、一ダースほどあなたに申し上げなくてはならないでしょうね)

アイリが飛空艇などというものに乗せられ、天空の島まで運び去られてきたのは、実に他愛もないような、くだらない理由によってだった。七年ほど前、ここパラドキアの城主ともいえるアシュラン

スと彼の率いる一党は、人気のない夜の白竜山脈の上空を、飛空艇の試運転のために飛んでいたのだそうだ。ところが、飛空艇が動力の不安定さによって不時着することになったのが、イツアーク村からほど近い、イツスーク平原のことだったらしい。

その日、村では篝火が焚かれ、短く過ぎ行く夏を祝うための星祭りが行われていた。村の娘たちはみな着飾り、男たちは一張羅の民族衣装に着替えて、歌や踊りが夜通し催されていた。そこでアイリもまた、リキエルから教わった流行歌のいくつかと、古代の王を讃える昔ながらの勲しを謳ったものを楽の音とともに独唱していたのだ。

これは、大分あとになってからアイリが知ったことなのだが最初、アイリはてつきり、アシュランスがほんの気まぐれから自分のことをさらい、パラドキアの王を讃えるための歌とやらを作らせるために、こんなく世界の崖てゝなどという場所へ、自分を連れてきたのだとばかり思っていた。実際、アシュランスは出会って間もない頃、自分はいかにもそのような悪役であるというように彼女の前で振るまっていたし、アイリが彼のことを心底憎むよう仕向けてもいたのである。

だが、実のところはそうではなく……アイリが今いる自分の状況を落ち着いて受け入れられるようになった頃、アシュランスが何を考えていたのか、その真意が初めてアイリにはわかったのだ。

「ここ、パラドキアはまあそれなりに広いがな。あんたは城砦の一部しか移動が許されてなくてさぞ窮屈だろうよ。そこでひとつ提案なんだが、俺の部下のひとりと結婚してみないかね？そうすれば、パラドキアの町の様子を見て歩くことも出来ようし、行動の範囲もぐっと広がって人生が楽しくなると思うがな」

アシュランスという男がそんなことを言ったのは、アイリが飛空艇にさらわれて三年ほどが過ぎた、十九歳くらいの頃のことだった。彼の言う部下のひとりというのが誰なのか　アイリにはすぐ見当がなかった。銀色の髪を、いつも細長い滝のように胄の後ろへ流して

いる、ファルークという名の若い男だった。

実際、イツアーク村の星祭りで、彼の姿をアイリは見かけていた。人口が二百人にも満たないような小さな村では、余所者というのは目立つものだ。またそれだけでなく、ファルークはこのあたりでは見たことのないアメジストのような紫色の瞳を持っていた。彼はおそらくそのような自分の容貌は人目を引くという自覚があったのだろう、村人たちが浮かれ騒ぐ群れの、篝火の光が届かない暗がりの中から……じっと、アイリの歌う姿を見つめ続けていたに違いない。

ここからはアイリの想像にすぎないことなだけけれど　アシユランスはファルーク、あるいは彼を含めた部下の数名に、飛空艇が不時着した付近の村を念のために探らせていたのではないかと思う。そして、勘の鋭いアシユランスは、ファルークの帰りが遅くなった理由を、是非とも知りたくなったのではないだろうか？アシユランスとファルークというのは、親友同士で、おそらくファルークが多くを語らなかつたとしても、アシユランスにはわかつてしまったのだろう。あの娘の歌声を、是非もう一度聴いてみたいと、彼が望んでいるということが……。

だが、もしアシユランスが突然ファルークのことを紹介したり、ふたりきりでいるよう仕向けたとしたら、おそらくアイリはアシユランスのことではなく、彼のことのほうをこそ憎んだかもしれない。アシユランスにはそのことがわかつていたのだ。だからこそ、自分にその悪役をあてがい、ようやくアイリが故郷を恋うる歌を歌わなくなった頃　狭い行動範囲が格段に広がるといった美味しいエサを吊り下げて、花嫁をひとり釣れば良いなどと考えたに違いない。

「相手は、どなたですか？」

どんな理由があれ、誰とも結婚するつもりなどなかったアイリは、冷やかにそうアシユランスに問うた。

この頃にはすでにアイリにも、アシユランスというく地の崖で、パラドキアの王とどうつきあえばいいのかが、よくわかつていた。

つまり、泣くにしろ喜ぶにしろ怒るにしろその他どんな感情であれ、彼は常に大きな動きや変動のあることを好む。だから、アイリが泣き叫んだり喚いたり、怒りとともに不満を言い表したりしても……諧謔主義者の彼にとって、それは興を引く面白いことでしかありえないのだ。

逆に、アイリが氷のように冷たい顔をして、眉ひとつ動かさないまましていると、アシュランスはいかにも不満そうな顔をするのである。そのことがわかってからアイリは、アシュランスという男に対して文句を並べ立てることなく、とにかくそうした氷の仮面のような態度を貫き通すということに決めていた。

「おまえは、誰がいい？ 竜騎兵たちはいつも胃で顔を隠しているが、あれは俺のように顔に焼け爛れた痕があるのかなんとか、そんな理由からじゃない。まあ、言うなれば主君である俺に気を使ってるんだろうよ……俺は普段、顔から仮面を外すということが滅多にないからな」

そうアシュランスは言ったが、アイリと会う時、彼は必ずその仮面を外して部屋へ入ってきた。もしアイリがその彼の顔を眺めて不愉快そうな顔をしたとすれば、アシュランスはいかにも楽しいものを見たというように、ニヤリと笑うのである。

「わたしは 主君であるあなたが結婚せよというから、わたしと結婚してもいいなどと考える、腰抜け男と結ばれたいとは思いません。あなたは、パレードキアの秘密を知った人間のことは生かして返せぬという理由から、わたしをこの不自由な身分に留め置いています。ですが、主君であるあなたが、もし誰それと結婚せぬのであれば、明日わたしを竜のエサにすると言ったとしても、わたしはやはりあなたの言うなりになろうとはしないでしょ」

「ほほう、なるほど？」

アシュランスは実に楽しげに、歌うようにそう言った。

「まあ、その強がりが一休あと何年続くかな？ もし気が変わったら、いつでも言うてくれたまえよ、歌姫アイリーン。それまでは、ここ

パレードキアの歌姫として、時々祭りや宴の席にて歌ってもらおうという、それだけのこと。それと、<地の崖ての国の王>が世界を征服した暁には　おまえの美声によって、この全世界の王たるこの私を、讃える歌でも歌ってもらおうではないか。何故といって私は、ただそのためだけにこそ……　おまえを田舎の寒村から気まぐれにも連れだしたのだからな」

アツハツハツ！と、さも楽しげに哄笑しながら、真紅のマントを広げ、アシュランスは<奏楽の間>を去っていった。その時、アーチ型の戸口のそばから、彼に続いて廊下を歩いていく人の姿がアイリの目の端を掠めた。蒼い胄の後ろから、長い銀髪をいつも靡かせている男だ。

おそらく彼は主君について歩く近衛のような役も仰せつかっているのだろう。今のような形で自分とアシュランスとの会話を聞いていることが多いと、アイリは当然気づいていた。

正直なところを言って、アイリは時々あのファルークという紫色の瞳の青年を捕まえて、「いいかげんしてもらえませんか!？」と怒鳴り散らしたい衝動に駆られることがある。祭りや宴の席などでアイリが歌を歌う時　その座にいる他の人間も当然、アイリの歌う姿を目に入れてはいるのだが、ファルークという青年は何か少し違った眼差しで自分を見ているように彼女は感じていた。

大勢の人間の前で独唱せねばならぬという緊張感のせいもあるにしても、アイリは自分が歌っている時にそこにどんな人間がいたかというのは、あまりよく覚えていない。いや、パレードキアに来て今ではもう七年になるので……アシュランスの部下の数名については、ファルーク同様、名前と胄をとった時の顔は一致しているにしても、問題はそういうことではないのだ。

独唱が終わり、王アシュランスの許しを得てアイリがその場を辞すと　アイリはいつも、そこには実はファルークひとりしかおらず、彼に対してだけ心をこめて歌を歌ってしまったような、そんな不思議な錯覚に捕われるのだった。

確かに実際、彼が自分のほうをこの機会にとばかりじつと見つめよく耳を澄ますように自分の歌を聴いているという気配を強く感じる……だが、それでいてこの七年の間、アイリはファルークとはほんの数える程度しか会話を交わしたことはないのだ。

それと時々、彼らが飛空艇に乗って<遠征>とやらに出て帰ってきたあと、アイリの部屋の前には必ずなんらかの花が置いてある。もちろん、誰がそんなことをしているのかはわからない。けれど、おそらくこんなことをするのはあの紫色の瞳をした男をおいて他にいないだろうと、アイリは見当をつけていた。

正直なところをいって、ここで少し難しいのは アイリにしても身分の高いファルークに対し、滅多なことを言うことは出来ないということだった。「自分のほうをいかにも意味ありげにじつと見るのはやめてください」とか、「いつも花を置いていくのはあなたなんでしょう!？」などと問い詰めるということは、とてもではないが出来ることではない。

だが、前に一度だけ……彼の自分を見る目の熱心さに耐えかねてそれに近いような言葉を言ってやりたいように感じたことはある。でもその時にも結局、アイリはただ顔を真っ赤にしたまま、ファルークの前を通り過ぎるということしか出来なかった。

(もし、これからまだこの軟禁状態が続いて)と、窓からの微風を受けながら、アイリは考えた。外は見渡す限り青く、遠い場所で竜騎兵たちが竜を操る訓練をしている姿が小さく見える。(もう二年か三年もすれば……わたしも娘の盛りを過ぎてしまっだろう。その前に自分から膝を折って、誰となり結婚させてくださいと頼むべきなのだろうか?確かにわたしはあのファルークという男に恋なぞしていないにしても、彼が邪念のない良い人間だと感じるのは本当だ。ただ、彼が本当には何を考えているのかがさっぱりわからないという、それだけで……)

四年ほど前 アシユランスから結婚云々の申し入れがあったから、ずっとアイリは待ち続けていた。いつも意味ありげにこちらを

見つめる彼の眼差しは、実は自分の勘違いであり、彼は彼にとって相応しい女性と今は結婚した、だからおまえにはもう用はなくなつたぞ……いつか、アシュランスがそう言ってくれはしないかと。

だが、ただ徒に歲月は流れてゆき、アシュランスがたまに思いだしたように自分の元へやって来て言う科白というのは、まったく同じものだった。

「どうだね？そろそろ強情つぱりの田舎娘の気も、変わってきたんじゃないかね？」

姿を見せぬよう、ファルークが戸口の脇に立っているかと思うと、アイリもまたいつもと同じ口調、同じ言葉しかアシュランスに返す気にはなれない。

「気が変わるというのは、なんのことを王はおっしゃっておられるのでしょうか？確かにわたしはあまり物のわからぬ田舎娘。ですが、王もご存知のとおり、寒い地方に生まれた者というのは、強情つぱりというよりも、そも我慢強いのでございます。もしも王に、気高き白竜山脈が、冠のように戴く万年雪を溶かすことが出来たとすれば、このわたしの心をも同様に溶かすことが出来でしょうに」

「ふむ。なるほど」と、アシュランスはいつものように、何か含みを持たせたニヤニヤ笑いをすることなく　突然王の威厳を身にまといつかせると、片手を上げ、真紅のマントを後ろへたなびかせた。「流石におまえは、我が友ファルークが惚れただけの女のことであるようだ。おまえもすでに気づいていようが、パラドキアの男というのは……歌姫アイリ、おまえの口調を真似るとすれば、そもとても性質が良いのだよ。もつともこれは、王である俺を除いてという注釈付きではあるがな。前にも話したとおり、我々<地の崖て>の民というのは、中央世界から隔絶された、岩山ばかりが続く不毛の地だけを相手にして生きてきたのだ。もちろん、竜に乗れば海を越えて軽く数時間でエルシオンへは辿り着ける。だが、我々は古くから言い伝えられる<掟>に長く縛られて生きてきたのだ……俺の顔が何故こんなふうに醜く焼け爛れているのか、その理由をもちろん、

おまえは覚えていような？」

アイリは、はいともいいえ、とも答えず、ただ眼差しによってのみ首肯した。

アシユランスはアイリがパラドキアへ来てまだ間もない頃、「ここから出してっ！わたしを故郷へ帰してっ！！」と鍵のかかった部屋の前でわめき続ける彼女に対して「慰みにひとつ、面白い話をしてやろう」と、自分の身の上話をしてくれたことがある。

アシユランスの父親はパラドキアに点在する小さな村の有力な族長のひとりであったという。それぞれの村々はとても貧しく、かろうじて自給自足の生活を送っていける程度であったのだが、それでも年に数度、竜に乗ってエルシオンへ渡り、く地の崖てくでは決して取れない様々な物資を調達してくる必要があった。

そしてアシユランスは、十三歳の時に初めて西の大海カイスヴィリーフを、父親とともに竜に乗って渡ることが許されたのだった。それまで痩せた土地とゴツゴツとした茶色い不毛の岩山しか知らずに育った少年にとって、中央世界の豊かさは衝撃的だった。

確かにく地の崖て国くは、エルシオンの人間から見た場合、地の崖て、この世の崖てのような場所であろうと、アシユランスはその時思った。だが、それと同時に彼は、その岩山ばかりの不毛な世界を自分もつとも愛しているとも強烈に感じた……何より、く地の崖てくという場所では、中央世界の人間たちの欲しがる鉱石や寶石類などが潤沢に取れるのである。

アシユランスは自分の父親が行商人と交渉し、ほんの少しの翡翠や縞瑪瑙、水晶や緑柱石やヒヤシンス石などを、恐ろしいばかりの値段で取引するところを見た。そして目立たぬ場所に留め置いた竜の背中に、ずっしりと重い食料品や衣類、生活用品の詰まった荷がくくりつけられるのを見て目を輝かせながら、自分の父親を見上げてこう言ったものだった。

「父ちゃん、俺たちって本当は世界一の金持ちだったんだね！！」
だが、エルシオンで見聞きしたことは成人した男たちの間でく語

つてはならぬこと」とされており、村の女や子供の多くは、岩山で取れる鉱石がエルシオンにおいてどれほど莫大な値打ちを持っているのかを知らないのである。

この時から、アシユランスは何かの流行病いのように「なんでそのことを口にしちゃいけないの？」とか「もつと度々エルシオンへ行つて宝石の原石を交換すれば、痩せた土地を耕す必要なんかなくなるよ」と、父親にしつこく聞いて回るようになった。そしてその度に族長である父親は、一族に千年以上も昔から伝わる「掟」の重要性を一番末の息子にとくと語つて聞かせたというわけなのである。「エルシオンの人間たちは、竜という存在を滅多に見なくなつてもう千年にもなるだろう。それは我々が注意深く竜を隠しながら向この人間とつきあつてきたからなのだよ。エルヴァルト海、セスアラシア海、デュークセヴァリア海、サンエマルト海、カイスヴィリ―フ海……その他どの海の領域からも、ここ地の崖で国へ中央世界から船が到達することはない。唯一、おまえが知っているとおり、船を自分の国土とし、海を移動するテガシエルパの民だけは我々と同じあいがあるがね。彼らもまたいにしえよりの「掟」を堅く守つて暮らしている信頼のおける民だ。神はそのように、遙かな昔に「境」を定められたのだよ。確かに、我々の生活は貧しく厳しいかもしれない。だが、地熱のお陰で季節を通して温暖だし、土地は痩せていてもそれなりに穀物や果物も実る……神をおそれ、自分の身をわきまえて暮らしていく分には不自由ないのだから、おまえも「掟」に従つて足ることを学ばねばなるまいよ」

アイリはもちろん、アシユランス自身もまたその存在を聞いたことはあつても見たことはないのだが、海には人の知られざる巨獣が住んでいるという伝説がある。ゆえに、エルシオンの人間たちは船を西の果て、あるいは東の果て、あるいは北の果てでも南の果てでもよいのだが、とにかく船を大海のあまり遠くまで漕ぎだしていくと、巨獣の怒りに触れて帰つて来られないという伝説を信じている。

すなわち、その巨獣とは海に住む竜と言い伝えられるリヴァイアサンであり、海獣クラーケンであり、あるいは船乗りを惑わすというローレライ、海の底にある神殿に住むと言われる人魚たちなど、とにかく神の定めたく領海を彼らが守っているがゆえに……人間はそこを超えてさらに遠くへは行けないのだと、エルシオンの人々は根強く信じ続けていたのである。

だがやはり、<地の崖で国>にも成人したばかりのアシユランスが疑問に感じたとおりのことを考え、禁を破る人間が時として生まれる。その禁を破った人間には、厳しい<掟>の鉄槌が下ることになるわけだが、もし仮にそれぞれの村の族長の許可なく竜を駆つて中央世界へ出かけた場合、その者に待っているのはネイディーン山の火口の入口であった。すなわち、パロドキアの人々の言い種によれば、「掟を破った者は火竜の口に飲みこまれねばならぬ」ということになるだろう。

そしてアシユランスは、実際十五歳の時にこの禁を破り、己の竜を駆つてエルシオンの地へ行き……あるうことが、ユーティン帝国の北、最北の地にある雪原地帯の民に竜に乗る自分の姿を見られてもいたのである。

アシユランスはなんとか嘘をついて誤魔化そうとしたが、そんなことが数度繰り返されるうちに、彼の父親は鋭くそのことに気づいたのであるう、<本当のこと>を洗いざらい末の息子に吐かせると、一族の間に彼を引き立てていき、裁判の場へと出廷させたのだ。

「それで、どうなったの？」と、その時アイリは、少し前まで自分が泣いていたことも忘れ、アシユランスのことを見返した。もちろん、彼がこうしてアイリの目の前にいるということは、ネイディーン山の火口行きという罰は免れたのだらうと、そう思いながら。

「近隣の村の族長全員が呼び集められて、族長会議っていう奴が開かれることになった。俺は刑が確定するまでは、岩山にある天然の牢屋にぶちこまれることになったわけだが……まあ、普通に考えたら死刑だな。だがまあ、十五つという年齢のこととか、俺が族長の

息子だつていうことなんかが考慮されたのかもしれない。それなりの罰を与えて一度懲らしめれば、二度と禁は犯さぬだろうという決定が下された。というわけで、背中の肉が裂けて暫くうつ伏せでなければ寝られんくらい。俺は鞭打たれることになったわけだ。だが、親父はいくら息子を可愛がっていたとはいえ、それでは族長として一族の者に示しがつかないと思つたんだらうな。『<掟>を破つた者はこのとおりになる！』と叫び、俺の顔をみんなが広場に集まっている目の前で、竜の火につけて焼いたのさ。竜が口から吐く火つてのは、普通の炎とは違う。親父は自分の竜に火炎を吐かせると、そいつを火炎石つていう石に移して、俺の顔に当てたつてわけだ……そんなことから、俺も今ではすっかり男っぷりが上がったつてわけだな」

少し不思議なことだつたかもしれないが、アシュランスからその話を聞いて以来、アイリは彼の醜く焼け爛れた顔の痕が、あまり怖くなくなった。ただし、今でも時々ふと、おかしな物思いに捕われそうになることがあるにしても。

つまり、アシュランスが何かの拍子に右の横顔だけを自分に見せて話をする時、彼が本当は実に優しい瞳をした人間であるということに、アイリは気づくのだ。けれども、左の瞼の際近くまで皮膚が焼け爛れているため、そちらの瞳は狂気を宿した竜のような眼差しに見える。そしてアシュランスが正面を向いて自分に何かを話す時、アイリはいまだにどちらの彼が<本当の彼>なのか、判別しがたいような、引き裂かれた印象を持つのだつた。

「もちろん、よく覚えています。一度聞いたら、忘れようにも忘れられないくらい、とても印象深いお話でしたから」

アイリはアシュランスから彼の身の上話を聞いた時、部屋にあつた十弦の豎琴を手にとり、それを奏でて王の心を慰めるべく、ひとつの歌を歌つた。歌劇『聖竜ルシアスと暗黒竜ヒュドラ』の中で、ヒュドラがルシアスに破れた時、嘆き悲しむアシェラを慰めるべく、アルゴルが妻に歌つて聞かせる歌を、である。

「つまり、俺が言いたいののは、だ。聖五大陸のそれぞれの国には、おのおの国民性みたいなものがあるだろう？ イツファノ民族は我慢強く、カーディル民族は思慮深く、ロディーガ民族は陽気、レガント民族は剛毅で慎重……といった具合にな。だが俺が思うには、そのうちのどこの男の気質も、我がく地の崖て国への男の性質には到底敵わんと思うね。まったく、今でこそこんなく天空島へ（アストラ・ナータ）なんていうものを創ったり、飛空艇なんていう途方もないものを創り出したりしているが俺たちは千年の間、まったく馬鹿のひとつ覚えみために、二言目にはとにかく掟、掟と言って暮らしてきたのだよ。だが、それを可能にしたのはとにかく、我々竜族の末裔が天の賜として良い気質を保ち続けてきたからなのだろう。正直なところを言つて、親友の俺の目から見てもファルークはいい男だと思うぞ？ まあ、あいつに欠点があるとすれば、少々気分にもら気があるところだが……なんにしても、おまえがもしファルークが気に入らないにしても、竜騎士の男たちのうち、誰と祝言を上げようと、幸せになれるだろうことは請け合おう。何しろ、俺たちはこんな不毛の土地をあてがわれているにも関わらず、そのことに文句も言わず、中央世界の豊かさを僻みもせず、忠実に掟を守って堅実に生きてきた民族の子孫なのだから。その血がおまえの中の我慢強いというイツファノ民族の血と混ざりあった時には、もしかしたら信じられないほどのいい子や孫に恵まれるかもしれない。まあ、そんなことも少し、考えてみることだ」

「……………」

アイリは思わず、暫くの間黙りこんだ。気分にもら気があるといえば、このアシュランスという男こそそうであろうとアイリは思うのだが、彼は珍しく今日に限っていえば、右の瞳の優しい蒼の瞳だけで語っていた。

もちろんそれは、彼が右の端正な横顔だけを見せてアイリに話していた、という意味ではなく……。

「さて、と。そろそろ恋のお邪魔虫は消えるとするか。このことに

ついで、俺は今後一切口は出さん。じゃあな、ファルーク」

そう言って、アシユランスは<奏楽の間>の、広い窓敷居に座っているアイリから見て、後ろにあるアーチ型のドアから外へ出ていった。ちなみに彼がこの部屋に入って来た時には、左側にある開け放たれたほうのドアから入って来たのである。

「……………っ！！」

そこから、銀の細く長い髪を背中になびかせて、紫色の瞳の青年が部屋に入って来た時　アイリは少なからず動揺した。今日もまたいつものとおり、アシユランスが意味ありげな軽口を叩いたあと、ファルークは腰巾着よろしく何も言わずに彼のあとへついていくのだらうと予想してただけに……アイリはなんとかこの場から逃げだすいい口実はないかと思ったくらいだ。

(ずるいわよ、こんな不意打ちみたいな真似するなんて!!)

アイリは手に豎琴を持ち、窓敷居に座ったまま、扇型の窓の外を見ている振りをしようと思った。ここでは相も変わらず竜騎兵たちが訓練しているらしい姿が遠く見える。

「七年もだんまりだったくせに、一体急にどうしたんだと、あなたはそう思っているのだらうな」

ファルークは、自分の主君であり親友でもある男　アシユランスがそれまで座っていた場所へ腰かけ、手を伸ばせば触れるくらいの距離のところから、アイリのことをじっと見つめた。

「たぶん、いつも意味ありげに自分のほうを見ているくせに、その実告白する勇気を持たない腰抜け男……とでも、あなたは思っただらうか？」

(何よ! やっぱりわかってたんじゃないの!!)

ムラムラと腹が立ってくるのを感じると、アイリは最初に感じた恥じらいの気持ちなど、まるでどこかへ吹き飛んでいった。

「いつも、あなたたちが<遠征>とやらへ行ったあと、わたしの部屋の前に花を置いていくのはあなたなんでしょう?」

「そうだ。薔薇に牡丹に芍薬、百合にジャスミン、その他全部俺が

置いたものだ。ここ、アストラ・ナータでも、最近エルシオンの良い土を運んできて、少しずつ造園作業なんていうのをやってるよ。そのうち、そうした土の中から向こうに咲く花がうまく育つようになれば……俺は毎日でもそんなものをあなたにあげられると思うのだが」

竜と目が合うことを怖れるように、アイリはファルークのほうをちらと盗み見るようにした。すると彼は、自分のほうから視線を外し、窓の外の青い空と、遠く黒い点のように見える竜の姿とを眺めている。

白哲の横顔は、しみひとつなく雪のようであり、彼が目許の涼しげな秀麗な顔立ちをした青年であることがわかる。ただ、アイリにとつてずっとわからないのは、そんな彼が何故自分のような寒村育ちの田舎娘に執着するのかという、その理由だった。

「何故、わたしなんですか？ここにも他に、あなたに相應しいような女性は大勢いるでしょうに」

「ファルークでいい」そう言って、ファルークは、何かとても面白いことでも耳にしたように、少しだけ笑った。「俺は、十六の時に一度結婚した。ちょうどあなたが、ここへ連れられて来たのと同じくらいの歳に。ここパラドキアでは、男は十三歳以上で、竜の儀式を通過していれば成人と見なされる。そして、十五六で結婚するのが普通だ。だが、妻は病弱で……結婚して一年もしないうちに亡くなった。俺は彼女があまり長くないと知っていたからこそ、婚姻の儀を急いだんだが、せめて子供のひとりくらい授かっていたらと、今もそう思う」

ファルークが窓の外から自分のほうに視線を戻すのを見て、アイリは赤面した。これまでも、儀礼的な挨拶程度の会話なら交わしたことはあるが、こんなに個人的なことまで彼が話すのを聞くのは、これが初めてだったからだ。

「わたしの村でも」と、やもすればか細くなりそうな声に、アイリは意識的に力をこめるように言った。「女性は早ければ、その

くらいで結婚していてもおかしくありません。わたしの姉のライリも……十七歳で隣村へ嫁いでいきましたから」

「そうか。歌姫アイリ、あなたももうここへ来て七年にもなるから、ある程度く地の崖で国への事情にも通じていよう。先ほど、我が主君アシユランスも語っていたとおり、今は我々にとって時代の一代変革期とっていい時だと思う。今から三十年も昔のことになるが、ナーラダという名の男が、やはり禁を犯し、ネイデーン山の火口へ放りこまれることになったのだよ。だが彼は、腕の立つような男ではまったくなかつたのだが、刑の執行人の手をうまく逃れることが出来たらしい。その刑の執行人もまた、咎められることを怖れたためかどうか、ナーラダの逃亡については口を閉ざしていた。その時逃亡の途中で彼は、今ではく聖魔の秘跡と呼ばれる洞を発見したのだ。我々にとつてネイデーン山は古代の竜が今も羽を休めていると言ひ伝えられる、聖なる山だ。そこを採掘したりすることなど、パロドキアの民にとつてはもつての他、例のうるさいく掟に触れる重罪なわけだが……ナーラダはまあ、その時すでに死んでいくはずの人間だったわけだ。

とはいえ、ここは見渡す限りの岩山ばかりの土地だから、食糧が欲しいとなれば当然、どこかの村の畑を襲うなりしなければならないだろう。先ほども言ったとおり、ナーラダという男は腕つぷしにはまるで自信のないような男だったから、なんとか自分の元の村の親友を頼ることにしたらしい。ある意味、その親友にとつては迷惑な話だったのではないかと思うが、なんにしても彼 俺の親父のレイルークは、死んだとばかり思っていた親友が生きていたと知り、族長の跡継ぎであるという自分の身分も忘れ、ひたすらナーラダのことを支援することにしたのだ。俺は当然、親父の息子としてそのく秘密を幼い頃から知っていた。ナーラダというのは実に博識な男で、村では学校の先生として人々から尊敬されているような人物だったらしい。そんな彼が特に熱中していたのが「言語学」という奴でね、く聖魔の秘跡から解読不能な文字の石版がいくつも出て

きた時も……ナーラダはその法則性に鋭く気づき、何が書かれているのかをそう時間をかけずに解き明かしたそうだ。そこに書き記されていたのは、空を飛ぶ箱舟の建造の仕方だった。そして<聖魔石>を使えば、同じように大陸や島を空中に浮かせることが出来るということもわかった……ナーラダが生きていることがわかり、彼が中心となって飛空艇が建造されつつあった頃、すべての部族の族長たちの間で、意見が割れていた。ナーラダはそもそも罪人なのだから再びネイディーン山の火口へ突き落とすべきだという者もいたし、言語学に精通した彼がこのような発見をなしたということは、これこそ天命だと言う者もいた。なんにしても、簡単にいえば我々パラドキアの民は、この時から大きく真つ二つに割れたんだ。<箱舟計画>に賛成する部族と反対する部族とにね……俺は親父がナーラダの親友で、先頭きつて彼に協力していたから、そのことについて選別の余地はなかった。だが、隣の部族だったアシユランスの父親は反対派だね。また、彼があのようにむごい仕打ちを父から受けなければならなかったのも、そうした事情が背景にはあったということだな。一族に伝わる<掟>を遵守させることの重要性を、再自覚させる必要があるとも思ったんだろう……俺は、そのことを知って以来、前から親しい友人だったアシユランスのことを自分たちの仲間にならないかと誘った。以来、彼はめきめきとカリスマ指導者として頭角を現すようになっていき、今では<箱舟計画>に協力し賛成したすべての部族の長、王になったというわけだ。実際、箱舟なるものが完成し、飛空艇と名づけられて竜のように空を飛ぶようになる。それまで反対していた一族の者たちも、こぞって我々に従うようになった。今でも唯一、アシユランスの父親だけは意地を張り通しているとはいえ……」

ファルークが、吟遊詩人ばりの語りを終えようかと言う時、アイリはポロン……と思わず豎琴を鳴らした。いつもは無口な彼が、こんなにも色々話すのを聞くのは初めてだったし、その時点ですでにもう、アイリにはファルークの言いたいことが大体わかっていたの

である。

何より、いつもファルークにじっと見つめられていると、彼に征服されたような、彼の支配の腕に絡められるような気配をアイリは感じていたが、この時ファルークがそのくむら気によってか、長い話をしてくれたことで、彼女はその脅威が効力を失っていくような感覚を覚えていた。

「だから、つまり……」と、ファルークは、照れたように、少し決まりの悪いような顔になった。「俺には、このことについて、重大な責任がある。一族にとってこれほどの大事に当たる時に、好きな女がどうだとか、結婚して身を落着きたいだの、そんなことはあまり考えていられなかった。だが、飛空艇がイツスーク平原に不時着することになったあの日、俺は自分の中でてっきりもうすでに死んだものばかり思っていた心が、甦ってくるのを感じた。それも、歌姫アイリン、あなたの歌を聴いたことによって」

アイリは何度か、無造作に豎琴を奏で続けた。なんて言ったらいいのか、わからなかった。自分の元には水がたくさんあるのに、喉の渴いた旅人にそれを与えるのを惜しむような、うまく表現できない気持ちだった。

ここで、「そんなことのためにわたしに七年という若い歳月を無駄にさせたのですか」とか、そんなことは言ってもすでに意味がなく、通り過ぎてしまったことなのだと、アイリにはわかっていった。彼はおそらく、自分に罰を与えるように、なるべく自分を抑え、アイリに対しても必要最低限接しないよう心がけてきたのだろう。そしてそのことを察したアシュランスが　おそらくは親友の心を思い、これまでうまく立ち回ってきたということなのだ。

彼は……ファルークは、おそらくパラドキアの王に次ぐくらいの、言うなれば権力ある立場にいる者だった。つまり、その気になれば彼は本当は、アイリのことを力づくでも自分のしたいように遇することが出来たに違いない。だが、彼は待った。アシュランスがく地の崖で国への男たちは性質がいいと言った、その忍耐強さによって

……。
アイリは言葉によって答えるよりも、別の方法を選んだ。つまり、イツァーク村の星祭りですべて初めて出会った時、彼が不思議なアメジストの瞳で自分を見つめていることに気づいた瞬間、ファルークが聞き入っていた歌を豎琴の音に合わせて歌うということにしたのである。聖竜ルシアスの訴えに応えて、人間の娘ルーシュが独唱するアリアを……。

おお、竜よ

我が魂よ！

おまえに私のすべてを捧げよう

我が骨と血肉、この心のすべてをも

聖竜ルシアス

おまえは私の夢

私の希望

私の心の喜び

そして私のすべて

おまえは跪いて

私に愛を乞う必要はない

むしろ私がおまえの前に身を投げだし

今こそふたりでひとつのものになろう

おお、竜よ

我が魂よ！

我らの心は今ひとつとなりて
邪悪なるものを打ち滅ぼさんとして立ち上がる

だが、このような歌を歌ったからといって、アイリがファルークの気持ちに応えたというわけではなかった。というより、彼女は彼の気持ちにすぐには応えられないという申し訳なさから……せめてかわりのものとして歌を一曲進呈したという、それだけのことだった。

その証拠にというべきか、アイリが歌を歌い終えた時、ファルークが彼女に触れようとする指を、彼女は拒んだ。勘の鋭い彼は、その時のアイリの顔に浮かんだ表情だけで、すべてのことが十分理解できていた。

「他に、誰か……今も想う男がいるということか？」

アイリは涙の盛り上がる瞳を伏せたまま、肯定も否定もしなかった。ファルークはアイリの長い黒髪を一房握りしめると、そこに口接けて言った。

「では、今はまだもう少し待とう、歌姫アイリーン。近いうち、決戦がある。この戦いはおそらく、我々にとって圧倒的優位と一方的勝利をもたらすに違いないが、それでも万一ということがあるからな。だからその前に一度、あなたの気持ちを確かめておきたかった」

そう言ってファルークは、<奏楽の間>から去っていった。アイリが西の空に目を向けると、そこには軍事訓練を行う竜騎兵たちの姿はすでに見当たらず、徐々に暮れはじめた夕陽の光が　あたりの岩山の茶色い肌を、次第に紅へと染めゆこうとしているところだった。

第2章 旅の仲間

ルークこと、ミュシアが蒼の魔導士セシルと赤い瞳のシンクノアと出会ってから、約半月ほどの時が過ぎた。

三人がルドミラという町のく踊る小鹿亭という旅籠で出会ったのは、第九の月のことで、今は第十の月である。エルシオンでは一年は十三か月、そして一月は二十八日であり、最後の第十三の月のみ二十九日が存在するのであった。

ミュシアとセシルとシンクノアが湯治町リディマを出立したのは、第十の月の中旬頃だったのだが、宿泊した旅籠く金のおんどり亭の主人は実に抜け目のない金の亡者であった。一行が旅を続けるのに、馬が是非とも入用であろうと見抜いていた彼は、自分の厩舎にいる馬をナルム村までなら一頭5レーテルで貸与してもいいとセシルに申し出たのである。

「徒歩でいけばまあ、十日はかかりまさあね、旦那。ナルム村にはわたしの双子の弟が住んでおりましてな、よくここリディマと往復してますんでさ。そんなわけで、馬のほうは次に弟夫婦が温泉へ入りに来る時にでも、返してもらえばいいっていう寸法でして。へっ、へっ、へっ！」

大して必要もないような揉み手を繰り返す太った宿の主人を見てセシルは溜息を着きながら、馬を三頭借りることにしようと思つた。何も別に15レーテル程度の出費が痛かったというわけではない。むしろ、人の足許を見る主人にしては、随分安い値を申し出たものだなとすらセシルは思っていた。

ところが、厩舎から使用人の子が馬を引いてくると、「あのう、セシルさん……」と、ルークがどこか言い辛そうにして、彼のことを見上げてきたのである。

「ぼ、ぼく、馬に乗ったことがないんです」

まるで、何かとても恥かしいことを告白するように耳打ちされて、

セシルは思わず笑いそうになった。

「それじゃあ、私の前に乗るといい」

セシルがそう言うのと、「うわっ！まずいだろう、それは！！」とシンクノアがすかさず突っこんだが、王都カーデイルへ辿り着くまでは、ルークが女であると気づいているということは、黙っておくという約束がしてある。

そこでシンクは誤魔化すように口笛を吹いていたのだが、なんとも言えぬぎこちない、白々しいような態度であった。

（やれやれ。嘘をつけない正直な貧乏人のせいで、これではカーデイルまで持つかどうか、まったくわからんな）

セシルは糧食類や旅に必要な道具の詰まった荷袋を括りつけると、先にミュシアを馬の鞍の前へ乗せ、それからその後ろに自分が乗った。

「蒼の魔導士先生、馬を一頭5レーテルでお貸しすると言いましたけど、今さら二頭しか借りないって言われてもねえ。何しろすでにお代もいただいていますし……」

金の亡者の太った親父がブツブツ不平を言い出すと、セシルは宿の主人に対し、まるで汚らしいものを追い払うかのように手を振った。

「いらん。とつておけ」

そう一言いい残し、鎧で軽く馬の腹を蹴ると、セシルは湯治町リデイマを後にすることにした。実際には、馬屋で馬を借りる時には、そのまま乗り逃げされないために、証文にサインした上、結構な保証金を支払わなければならない場合が多い。つまり、借り手の過失によって馬が逃げたりした場合、その保証金は戻って来ないというシステムである。

にも関わらず、一頭たったの5レーテルで<金のおんどり亭>の主人が馬を貸したのにはやはり、理由があるう。まず第一に、セシルが正式な魔導士会に所属する高位の魔法使いであるということが大きかったに違いない。何故とって、蒼の魔導士を名のるセシル

という男が馬を乗り逃げしたという訴えが魔導士会の本部（カルデイナル王国の王都、カーデイルにある）へ提出された場合、それは実際に調査されるかどうかは別としても、とりあえず記録としては残るのである。

そして、あまりにもそうした訴えが多数の者から出された魔導士というのは、称号を剥奪され、魔導士学院から卒業時に授与された杖を返納しなくてはならないという法律が、五王国すべてに存在するのであった。

もっともセシルの場合、魔力を行使する時に杖やそこに象嵌された魔石に力の発動を補助してもらうことはないので、称号がなくなるのと杖を折られようと、どうということはない。下位の魔法使いは、杖を取り上げられると魔法が使えなくなったりするらしいのだが、それは上位四級の魔導士にはあまり関係のない話だといえる。しかしながらやはり、人の評判や名誉といったものは、金で買えなただけに大切なものであるとセシルは思っていた。

第一、闇の魔導士狩りが嫌になって破門された身分も同然のセシルが、何故いまだに魔力の発動となんの関係もないヒヤシンス石の嵌まった櫛の杖を持ち続けているかといえば、そこには当然理由がある。＜姿変えの術＞により、老若男女、どんな姿にでも化けることが可能だとはいえ……セシルはそもそも、自分の容姿を偽る術が不得手なのではなく嫌いであった。だが、となると、彼の容姿はこの町でも村でも、あまりに目立ちすぎた。それこそ、セシルの容貌を一目見ただけで、その後ずっと忘れずに覚えている人間は多いに違いない。

そこで彼にとって物を言うのが、上衣につけた蒼の魔導士の襟章と、手に持ったオークの杖であったかもしれない。すると、大抵の人間が何故というのはセシルにも説明が難しいが、とにかく「納得する」のである。

簡単にいえば、お偉い魔導士先生だから、俺たち平民とはそもそも醸しだされる雰囲気が高貴で違うんだろうよ……といったような、

そうした「納得」の仕方とでも言えばいいだろうか。もしそれがなかった場合、金目のものを持っていないと踏まれ、妙な連中に後をつけられるといったようなトラブルが増加するということを、セシルはよく知っている。

だが、最初から高位の魔導士であるということがわかってさえいれば、いらぬ問題にかかずにあわないですむ回数というのは、格段に減ってくるのだ。セシルはその違いを試してみたことがあるが、「魔導士だったら、是非あれをやってくれ」とか「これをやってくれ」と正面切って頼まれる面倒のほうで、処理するのが遥かに楽なのである。

まあ、そのような理由によって、何もく蒼の魔導士>という称号に後生大事にしがみついているというわけではなく、セシルは今もヒヤシンス石の象嵌された櫂の杖を大切にしているということだった。

「あの、すみません。ぼくが馬にさえ乗れば、旅程がもつと短く済んで、それだけ早く王都カーデルにも到着できるのに……」

「なに、べつに構わんさ」と、少し先を速足に進んでいくシンクノアのことは構わず、セシルは微かに笑った。「第一、早いといえばエシュタリオン街道を馬に乗っていくのが一番速かったんだ。その道を選ばずにわざわざ遠回りすることを選んだ時点で、こうなる覚悟はしていた。それはあいつも同じだろうよ」

そう言って、シンクノアの長い黒髪の揺れる後ろ姿を、セシルは手綱を持った手で軽く指差した。

「だが、まさかとは思いが、エシュタリオン街道に行く道を選ばなかったのは、馬に乗れなかったことが理由ではあるまい？」

「まさか！」

ルークはびつくりしたように、一瞬だけ後ろを振り返り、セシルと目が合うと再びまっすぐ前を見た。

「……第一、馬に乗らずに徒歩でいったとしても、エシュタリオン街道を歩いていくのが最短ルートだったんです。たぶん、湯治町リ

ディマに辿り着くのも　ぼくひとりだったら、おふたりと一緒に
行くより、もつと時間がかかっていたと思います。セシルさんが抜
け道とか、どこをどう通ればいいのかとか、道をよく知ってください
ていて、本当に助かりました」

「いいえ、どういたしまして」

セシルは素直にそんな科白を吐いている自分に驚いたが、（まあ、
この娘が特別製の天然記念物っていうことなんだよな）と、彼女に
気づかれないように、心の中で何十度目になるか知れない溜息を着
いた。

例の、ルークがリウマチの癒しを祈ったとかいう女性が　祈っ
てもらった時には何も起こらなかったが、翌日に突然曲がっていた
手が真っ直ぐになったとかで、町の噴水のある広場で大騒ぎしだし
たのである。

そして、ルークの泊まっている宿である<金のおんどり亭>まで
やって来ると、泣きながら感謝を述べ、他の湯治客の間に吹聴して
まわった結果として……その前まで広場にいた似非神官は、商売上
がったりということになってしまったのだ。

おそらく、馬を一頭5レーテルなどという値段で貸してもいいと
<金のおんどり亭>の親父が思ったのには、そこらへんにも理由が
あったらうとセシルは思う。ルークのお陰で部屋は即座満員御礼
となり、他の宿を経営している主人たちは、どこか恨みがましい目
で金の亡者の親父を眺めやっていたものだ。

似非神官のじじいはいえ、やさぐれたような格好で賭場に出
入りしていたようだが、ルークは彼に森で折ってきたヒソプの枝を
渡していたのである。

「ぼくはこれをあなたにただで差し上げますから、あなたもただで
人の病いのために祈るようになしてくださいと思えます」

セシルは内心、（そんなもので本当に病気が治るのかね）と訝し
んでいたが、十日ほどの滞在ののちに湯治町リディマを後にしてし
まった今　どうなったのかはわからない。

なんにしてもセルルは、あの似非神官のじじいが「これはルシア
ス神殿に仕える神官さまからいただいた、ご利益あるヒソプですぞ
！さあ、みなさん並んだ、並んだ！！」と言っている姿が、脳裏に
ありありと浮かんで仕方ないのだが。

実際、何故あの金権主義的強欲じじいにそんなことをしたのかと、
セルルは興味を引かれてルークに聞いてみたのだが、彼女はただ「
人の持っているものを横から奪うのはよくないことです。それでは、
泥棒と同じことになってしまいますから」と答えただけだった。

（まったく、よくわからん娘だ）

若干呆れつつそう思いはするものの……自分に背中を預けないよ
う背筋を伸ばしている目の前のルークを見ると、セルルは奇妙
なおかしみが胸にこみあげてくるのを感じた。

よくわからないが、自分にしても最近、こんなふうに関心の中で笑
っていることが多いというのは、確かなことだった。

「シンクノアの奴、さっさと先へ走っていきすぎだな。どれ、少し
追い越してやるか！」

そう言うと、セルルはルークの体を自分のほうへ引き寄せ、馬に
速度を上げるよう合図をだした。ルークは一瞬驚いたようだったが、
セルルが他意なく彼女のことを抱きしめるような形になっても、何
も言わなかった。いや、そうではなく何も言えなかったのだという
のは、おそらく、ミュシア自身にしかわからぬことだったに違
いないが。

湯治町リディマから次に向かったナルム村では、<銀のめんどり
亭>という旅籠に一行は宿泊することになった。リディマで<金の
おんどり亭>を経営していた親父と、ナルム村の<銀のめんどり亭
>の親父とは、双子であるというだけあって、顔も性格も瓜二つと
いうくらい、まったくそっくりであった。

「へっ、へっ、へっ！旦那方、馬のほうをご所望で？まあ、この鹿

毛と灰色のは俺の兄貴のものだから、俺の一存では売れないにしても……ラッキーでしたね、旦那方！俺の知り合いに、いいのを何頭も持つてるのがいますよ」

「それは大体、二頭でいくらくらいになる？」

金の交渉事になると、何かと神経質に気遣わしげな顔になるルークの視線を感じながら、セシルは下腹の突きでた、禿げの中年親父と会話を続けた。そう、<金のおんどり亭>と<銀のめんどり亭>を経営する双子の兄弟の違い、それは頭の頭髪のあるなしであった。「そりゃあ旦那、物によりけりって奴ですよ。ここから王都までっていうと、まだまだ結構ありますからねえ。ここでいい馬を仕入れて王都で売れば、なかなかいい釣りが出るかもしれないってことを考えて、駿馬に大枚をはたくつてもアリかもしれませんぜ？都じゃあ、いい馬に目のない馬気違いの貴族の方なんてえのがいらつしやって、そうしたやんごとなき方々つてのは、実際には良馬を見抜く目がなくて、くずみたいな馬でも喜んでお買いになったりするっていう噂ですし」

「そんなことはどうでもいい。ついでに、値段についてもそうとやこうつるさいことを言うつもりはない。とにかく、問題なのは私がこの目で見て気に入るかどうかということだ」

セシルはぞんざいにそう言い、その日はそれで話を切り上げて、部屋のほうへ引き上げた。またしても「自分は一番安い部屋でいいです」、などとルークが寝言をいうので、セシルは疲れに任せて彼女を二階の<銀のめんどり亭>の中では一番上等だという個室へ放りこんだ。

そして、自分は一階にとった部屋で、その日はシンクノアとふたりに寝るということにした。もちろん、ベッドはそれぞれ壁際にひとつずつあるのだが、セシルはシンクノアに対し、ある重要な話があったのである。

「貴様、私に何か隠しごとをしているだろう？」

湯治町リディマを出た日の夜　一行は、適当な場所を見つけて

野宿するということになった。セシルは湯治町リディマに辿り着く前のこと、野宿して三晩目の夜くらいに、結界の外を邪霊がうろついているのを見てはいた。

その時にその邪霊どもが<鍵>がどうのという話をしていただけでも当然覚えている。だがまさか、自分が寝ずの番をしなければならぬほどの脅威を感じるはめになるうとは、想像してもみなかったのである。

そのせいでセシルは寝不足となり、翌日はシンクノアの乗る馬にルークのことを預けるということにもなった。とにかく先を急ぐ必要があり、朝早く出発して速駆けしてゆけば、なんとか日の暮れるぎりぎりにはナルム村に辿り着けそうでもあったのだが……やはり、地形がそれを許さなかった。下馬しなければ通過できない峡谷があり、道はそうならかな平野や丘陵地帯ばかりというわけではなかったのである。

もちろん、セシルはそうしたことも最初から承知した上でそのルートを選んではいた。そう先を急いでいるわけでもないし、ゆっくり行っても誰が損をするということもないだろう、というくらいは気持ちで。

だが、邪霊憑きのオオカミが結界の外をうろつくとあっては、話が別だった。それがもしたただのオオカミだとしたら……火炎系の魔法を少々使って追い払えばいくらいの話ではあったろう。第一、<獣除けの結界>であれば張ってあったので、飢えたクマでも毒を持った蛇でも、近づいてくるといことはないはずだった。

だが、邪霊憑きのオオカミというのは厄介なのだ。そちらの生命を奪えば、邪霊は居所を無くすだろうが、そのためにはこちらが結界の外へ出て相手と対峙しなければならない。そして、オオカミが骸となって倒れた瞬間、今度は邪霊のほうと戦わなければならないのである。

もつとも、このような戦いに、セシルは慣れてはいた。辺りを三十頭ほどの邪霊に操られたオオカミどもに囲まれようとも、そう驚

くには当たらない……だが、セシルはとりあえず今のところ<アレ>としか呼びよぶのではない、おぞましいものを見てしまったのだ。

喰人鬼^{ゲール}であれば、セシルも撃退した経験がある。これもまたやはり、闇魔法に身を堕した魔導士が、死人使い（ネクロマンサー）となって操っていたということのだが、セシルが<アレ>としか呼びよぶがないと思ったものは、おそらくヴァリアントと呼ばれる存在ではなかったかという気がしてならない。

ヴァリアントのヴァーリとは、一つ眼という意味であり、アントウスというのは複数形で風とか霊といった意味がある。つまり、正確にはヴァーリ・アントウス、一つ眼の風霊とでもいえばいいのかもしれないが、それが邪霊憑きオオカミどもの首領であり、先日セシルが「自分の足でここまで来い！」と言ったとおりに……彼は実際にやって来たというわけだ。

正直なところを言って、向こうが本気になれば、自分の作った結界など五秒も持つまいということが、セシルにはよくわかっていた。それと同時に、<彼>（あるいは彼女）が　今回はただ様子を見に来ただけだということも、セシルは漠然と感じていたのである。

お互いに本気でやりあえば無傷ではおられず、そんな手間や面倒をかけずとも、「彼（彼女）」の欲しいものが<鍵>であるとしたら、もつといい他の「隙」を窺ったほうが、得策というものだったろう。

セシルが思うには、「彼」はおそらく<鍵>が本物かどうかを「直接自分の目で」確かめに来たのではないかという気がしてならない。

結局、持久戦に耐えられなくなって逸った邪霊憑きオオカミどもは、結界に体当たりをはじめたのだが、それほどやわなものをそもそもセシルは張っていなかった。そのお陰で奴らのうち数匹は、勝手に自滅してくれたわけだが……結局、夜明けになるまでヴァリアントの脅威は去っていかず、セシルは一睡も出来なかったというわけである。

「あのさあ、物事には順序ってものがあるじゃんよ。あの子、今日すごく可哀想だったと思わねえ？朝起きたらきのうとは打って変わってご機嫌ナメな魔導士先生がピリピリ神経を逆立ててて……なんかもー、「きのうきつと自分が気に障ることをしたから、センルさんは怒ってるんだわっ！」とかいう心の声がずっきゅんずっきゅん聞こえちゃって、俺も今日一日、すげえつらかったわ。じゃなかったら、可愛い女の子と相乗り出来て、ちょっとドキドキな展開だったっていうのにさ」

「なーにが、ドキドキの展開だっ！！！」

（この阿呆が！）と思いながら、センルはオークの杖で床をドン！と一突きした。

「貴様、私に以前、自分の剣を見せたことがあったな？思うにおまえは、あの剣が本当は何かを知っている……その上でおそらく、私ほどの程度の魔導士なのか、見極めようとしたんだろう？表面上はいかにもお調子者ぶってるが、その実、貴様はなかなかちゃっかりしているな。その分だときのう、本当は寝たふりをしながら何が起こっていたのかにおまえは当然気づいていた……違うか？」

「ははっ。俺、実はいびきかいた振りすんの、結構得意だったりするんだよな。でも俺、なんかまずいことになってるってわかってるから寝た振りしてたんじゃないぜ？もしあのままオオカミどもが襲ってきたら、剣をとってあんたに加勢してたさ。けど、旅慣れたあんたになら、説明するまでもないことだけど 体を横にして休んでおくだけでも、大分違うからな。この剣の名前は「不殺ころさずの剣」、アスタリオン」とか言うらしいが、剣の鞘が持ち主の俺にも抜けないってというのは本当の話さ。でも、前に邪霊どもが言ってたく鍵がなんとかっていう話は俺、初耳だなあ」

「貴様……っ！！！」

（まさか、あの時も起きていて、邪霊どもと私のやりとりを聞いていたとはな）、そう思い、センルはどっと肩に疲れが押し寄せてくるのを感じた。

なんにしても、自分はきのう寝ていないのだ。その上、強行軍で馬を飛ばしすぎた。ルークが時々、何か物言いたげな眼差しで自分のほうを見ていることにも気づいていたが、彼女のことを気にかけてやる心の余裕など、セシルには残っていなかったのである。

「いや、ほんとマジな話、あんたには悪いと思ってるよ」

脱力したように、セシルがどさりとベッドに横になると、シンクノアはいつものおちゃらけた調子ではなく、若干真面目な口調になつて言った。

「俺さあ、たぶん疫病神なんだと思う。瞳が赤いつていうのもそうなんだけど、何か呼ぶものがあるんだろうなあ……それで、もしあんたが「じゃあもうついてこんなっ!!」つて言うんなら、実際そうしても全然いいんだ。あんたもたぶん同じこと考えてんだろっけど、あの子、すごくいい子じゃん？最初はさあ、ルシアス神殿の神官さまと一緒にいれば、この俺の運のなさも少しは持ち直すかもつて思ったんだけど……きのうの<アレ>をちらつと見てから、俺もちょっと考え変わったつていうかさ。俺みたいな人間のために、あんないい子に迷惑かけられないもんな。うん」

「その同じ科白、明日ルークの前で言ってみる」

セシルはもう一度、櫂の杖を支えとするようにして、ベッドサイドへ起き上がった。

「私も、単に貴様が遠くへ行けば脅威が去るというのなら、そうもしよう。だがおまえ、その剣をさすらいの放浪剣士とやらから、一体いつ受けとつたんだ？第一、もしそれが奴らの探し求める<鍵>なら……おまえが今現在こうして生きていることのほうが不思議だろう。それとも貴様は、あのヴァリアントを撃退できるくらいの、実は物凄い剣の使い手だったりするわけか？」

「まさか。流石に俺もそこまでのビッグマウスじゃないさ」と、シンクノアは笑った。「あいつらがもし、こんなものを本当に欲しいんだとしたら　まあ、とくに俺なんか長い旅の間におつ死んで、誰かがこの魔剣の所有者になつてるだろうよ。なんにしても俺

は、ものをしゃべるオオカミにつけねらわれたりしたことはない。

大体、オオカミってのはそもそも根が臆病だからな。家畜を貪り食べるおぞましい様子なんかを見て、人間は自分たちも襲われるって感じるんだろうが…… 実際には奴らが人間を襲うってのは滅多にない話さ。俺は小さい頃からあいつらとつきあってきたが、仲良くなるとキンタマまで揉ましてくるようになるからな。ま、そんな話はどうでもいいにしても 勘の鋭いあんたが、実は見落としてることがあるんじゃないか？あの子が、実は女だってことの他にさ」「そうだな」と、セシルは寝不足のせいでうまく回転しない思考回路で、それでもなんとか考えようとした。「どうやら、明日にでもそのことを直接ルークに聴いてみる必要があるようだ。人家にいよつが野宿しようが、果たさなければならぬ使命がある時には、奴らは再び襲ってくるだろう…… そもそもあの子は我々と出会う前までは、ひとり旅をしてきたんだろうからな。仮に、聖都ルシアスが陥落した時に、神殿に眠る大事な宝のようものを携えて逃げることになったと仮定してみよう。そしてそれが邪霊どもの欲しがる<鍵>と呼ばれるものであったとして それは一体、なんのための<鍵>なんだ？」

「今日のアんたはどうもいまいち、冴えないみたいだな」

シンクノアがそう言って笑うと、セシルは「うるさいっ！！」と一喝し、まるで目の前を蠅が飛んでもいるかのように、手を振ってはたき落とした。

「あ、あのう……」

コンコン、とノックしたあとで、どこか怯えたような声が続ぎ、セシルとシンクノアは思わず顔を見合わせた。

「お食事の用意が出来たそうなので、ご一緒と思って」

その声を聞いた時、セシルは眠い目を手指でこすり、シンクノアは思わず声にださずに笑ってしまった。何故と行って、一度相手が女だということがわかってしまうと、それまで何故男だと思っていこんでいたのが、シンクノアにはまったく理解し難かったからである。

（あんなに可愛い声してんのにさ。匂いがどうとか変態くさいことじゃなくて、なんで気づかなかったんかな、俺）

「あーい。今、セルおじいちゃんと一緒にいきますよー」

「だから、その呼び方はやめろって言ってるだろーがっ!!」

切れかかっているセルを見て、シンクノアはやはりまた笑わずにはいられない。こいつもからかい甲斐のある、つくづく面白い奴だとシンクノアは感じる……だが、早くもそろそろ離れるべき潮時というのが来ているのかもしれない。シンクノアとしてはもう少し持つかと思っていたが、邪霊憑きオオカミに狙われたり、気味の悪い妖力を全開にした巨大な一つ眼の魔物までがお出ましになったとあっては、彼らにこれ以上迷惑をかけられないと思っただのだ。

といつても、そんなものに狙われなければならぬ何かを自分が所有しているという可能性については　シンクノアは本当に心当たりがなかったのだが。

「シンクノア、悪いが私の分の食事はここまで持ってきてくれないか？そして食事が済み次第、私はすぐに眠る」

「あーいよ。今はまあ、一年で一番うまいもんが食える季節だからなあ。金の亡者の弟がそれなりに気を利かせてくれてれば、ちよつとしたうまいご馳走にありつけるだろうよ」

今は第十^{ルセル}の月の半ばである。別名狩獵月とも呼ばれるこの月は、人々が一年に収穫したものを屋根裏や地下室に蓄える時期で、ゆえに樽の中などに貯蔵しきれなかった余りものに多くありつける季節でもあるのだ。

といつても、＜銀のめんどり亭＞の亭主は、＜金のおんどり亭＞を経営する兄ほど羽振りがよくなかった上、大変な締まり屋でもあったので　シンクノアとセルとルークは、とうもろこし粉のパン各ひとつずつと、味の薄い豆のスープ、それに鳥の胸肉を細く切ったのを一切れずつ与えられたというだけであった。

「あんだ、一体これにいくら支払ったんだ？」

シンクノアが笑いながらセルに盆を渡すと、「あのドケチ兄弟

め！」という呪いの言葉がセシルの口から洩れた。

「明日の朝食代まで込みで、全部で十七レーテル支払ったんだぞ。まったく、人の足許を見ることにかけては、顔だけでなく性格までそっくりな兄弟だな」

ナルム村は、全人口が百人にも満たない小さな村だ。ゆえに、旅籠などというものを経営しているのは、ここく銀のめんどり亭以外にはない。「それがお嫌なら、どうぞ野宿してくださいまし」といった涼しい顔つきをしたおかみに、セシルは金を渡したのだったが、やがてその理由が何故だったのか、三人にもよく飲みこめた。セシルとルークとシンクノアは、店のカウンターではなく、一階のセシルとシンクの部屋で盆を寄せあつて食事をすることにしたが、やがて銅のなべか錫のおたまでも床に叩きつけるような、けたたましい音が響いてきたのである。

「あたしの作るものに、いちいちガタガタお言いでないよ！この甲斐性なしのつるっパゲが！」

「そういうなよ、おまえ」と、心底奥さんを怖れているらしい、恐妻家の亭主が囁くような小声で言った。「だって、十七レーテルももらってるんだぞ？スペアリブのひとつくらいつけてやらにゃあ、値段に見合わんだろうよ。それにおまえはもともと大して料理が上手いってわけでもないし……」

「なんだってえ！？そのうまくもない料理を二十年以上もたらふく食つて、こんなに太つちよになつたのはどこのどいつなのさ！？まったく笑わせてくれるよ、このだんだん腹のへなちよこ男めが！」
「しっ！おまえ、そんな大きな声を出したらお客さんに聞こえるだろうが」

ここで奥さんの、意地の悪い感じのする笑い声がアツハツハツ！と響いてくる。

「聞きたい奴には聞かせときゃいいんだよ。それとも何かい？あんな、客の前ではあたしの尻に敷かれてるつてとこ、見られたくないとても言うのかい？そんなこた、村中の人間が知ってることさね。」

<銀のめんどり亭>の亭主は、めんどりに怯えてトキをつくるのも忘れちまつてるんだと！いやはや、子供ってのは、なかなかうまいこと言うもんじゃないか」

今度はけらけらと愉快そうに笑う、朗らかなおかみさんの声が聞こえてくる。ふたりはなおもぼそぼそと何か話している様子だったが、セシルは輪をかけてさらに疲れた気がして、溜息を着きたくなかった。

「あのおかみさん、ピクルスを漬けるのはうまいみたいです」

そう言っつて、何かをフォローするように、ルークが鳥の胸肉の横にちよつぴりのつた、胡瓜のピクルスをフォークで刺した。

「確かに。鳥の胸肉のほうもうまいことにはうまいが、たったこれだけの量ときては、腹が膨れた振りしかできません。まずい豆のスープも、あつたかいだけ感謝しろといったところだな」

「ま、屋根があつてとりあえず口に入れるものがあるっただけでも、俺にとつちやあ御の字だぜ。あゝ、食つた食つた!!」

そう言っつてシンクノアは、ベッドの脇にあるテーブルにお盆をのせ、暖炉に薪をひとつ足した。そして暫くの間火かき棒で暖炉の中の灰をかき混ぜたりして、火の番をして遊んでいる。

「本当に、火のある場所で暖かくしてられるっただけでも、ぼくは神さまに感謝しないと……」

いつもなら、おそらくは呆れつつも、セシルはルークのこの物言いにイラツと来たりはしなかっただろう。だがこの時、旅の疲れと寝不足のせい、セシルは腹にたまりかねるものを感じたのだ。

「おまえ、何か私たちに隠していることがあるだろうか？」

突然なんの前置きもなくズバリとそうセシルが聞くのを、シンクノアが驚いたように振り返る。まだ半分も食事を終えていないルークは、ベッドサイドに近づけたテーブルの前で、隣の魔導士をまともに見ることさえ出来なかった。

「王都カーディルへ辿り着くまでは、何も聞くまいと思っただけだな。毎度野宿の度に命の危険に晒されていたんでは、こつちの身

が持たん。ルークっていうのもおそらく偽名なんだろう？四か月ほど前の第六の月に、おまえは聖都ルシアスにいて……そこで何かがあつて逃げだして来たんだ。違うか？」

ガシャーン、とお盆を引っくり返しそうになりながら、ルークは立ち上がって、何かを言おうとした。

「ぼ、ぼくは……」

そう言いかけて、喉に言葉が引っかかる。とうとう、怖れていた瞬間がやって来たと、彼 いや、彼女は思った。本当のことを話すにしても、さらに嘘を塗り重ねるにしても、この場合、とにかく何かを言わなければならない。

だが、真実を鋭く見抜くような蒼い瞳の魔導士と、どこか気遣わしげなシンクノアの赤い瞳に出会うと、ミュシアはそれ以上何も言うことが出来なくなり、気づいた時には結局、その場から逃げだしていた。

「おい、待てっ……！」

これ以上余計な面倒をかけさせるな、というようにセンルが舌打ちするのを見て、シンクは立ち上がるうとする彼のことを押し留めた。

「今のおんたじゃ、あの子には逆効果だ。かわりに、俺がいく」

シンクノアは火かき棒のかわりに細身の剣を手にとると、外へ駆けだしていった。ルークは階段を上がって自分の部屋へ戻ったのではなく、そのままの格好でドアを突き破るようにして出ていったのだ。剣は、邪霊憑きの獣にでも襲われた場合の、用心のためのものだった。

「ええ、わたしも初めて見ましたよ。マゴクと呼ばれる忌々しい赤い瞳の男をね。そんな男を泊めてやってるってだけでも、慈悲深いと思ってもらわなきゃ……」

カウンターの前には、いつの間にか宿のおかみの友人がふたりほど腰かけていて、村の噂話に花を咲かせていたらしい。店の主人は台所の隅のほうに小さくなって、ビールをちびちびやっている。

シンクノアは、宿のおかみが気まずそうな顔をするのを無視すると、玄関から走って出ていった。これと似たような言葉なら、生まれた時から何千回となく聞いているので、心が傷つくとかなんとかそんなことはまるでない。というより、彼にとってはすでに「それが当たり前のこと」「にすらなっていた。

「おい、ルークっ！！待ってっ！！」

今夜は双子月がともに、どこか暗く輝いていて、あたりも闇の気配が濃かった。これもまた、一種の迷信のようなものであるうとシンクノアは思うのだが、第十の月の半頃から第十三の月が終わるまで、ふたつの月は満月であつても、どこか色に翳りを帯びており、夜が普段以上に暗くなる。それはその期間、闇に蠢く魔のものどもが活動を活発にするそのせいだと、人々は一般に信じているのだった。

追いつかれまいと思つたのかどうか、ルークは道を左右にきよるきよる見やると、どここの家のものかもわからない納屋のほうへ飛びこんでいった。

「やれやれ……」

(このクソ寒い中を、まったく頼むぜ)と思いつつ、寒村育ちのシンクノアにとっては、この程度の寒さなど、実際にはまだ寒いとすら言えないようなものだった。

「こ、来ないでくださいっ！！」

シンクが納屋と思つたものは、実は馬屋で、そこには綺麗な栗毛の馬が二頭、囲いの中で身を寄せあうようにして並んでいた。

「セシルなら、部屋にいるから安心していいよ」

薄い月明かりの中で、ルークが必死に頬の涙をぬぐうのを見て、シンクノアは胸を突かれるような思いがした。ぐすつとか、ひつくとかいう、しゃくり上げるような声が聞こえると、気のせいかな馬たちも、彼女のことを気の毒がっているような気がしてならない。

「あんさあ、別に俺たち……っていうか、俺もセシルに言われなかつたら気づかなかつただろうけど、ルークが嘘をついてるとか思っ

てるわけじゃないんだぜ？世の中には嘘も方便っていうかさ、そうしなきゃ生きていけないっていうことがたくさんあるわけ。ルークはたぶん、神殿にずっといて知らなかったかもしれないけど……ま、世の中ってのはとかく真冬に吹きすさぶ風のように冷たいもんだからな。俺はそのこと、身に沁みてよく知ってるよ。何せ、マザル「マゴクって呼ばれる忌み子なんだからさ」

「マザル……って、それは何ですか？」

マゴク、という言葉を発音するのが嫌だったのだろう。神官服の袖で目の涙を拭くと、震えるように小さな声でルークは聞き返した。「マゴクっていうのは、イツファロの言葉で呪われた子っていう意味だ。でも、その言葉に関してのみ、他の国でも同じように通用するとは、俺も実は思ってたなくてさ。こここのく銀のめんどり亭のおかみもついさっき言ってたぜ。『あんなマゴクを泊めてやるだけでも、自分は慈悲深い』ってな」

「……………」

シンクノアは馬屋の片隅に干草が積み上げられているのを見ると、その上にゆっくりと腰かけた。自然、ルークもまたそんな彼の隣に並んで座ることになる。

「なんだか今日は、窓から差しこむ月の光が暗い感じがするな。三日月ってほど細くもないのに、星もなんだかその光を落としてる感じがする……人間っていうのはとにかく、このく感じ>って奴に弱いんだよな。実際には嘘をついてなくても、嘘をついてるく感じ>がするってだけで、そっちのほうが真実になっちゃうたりするもんなんだ。一年の中でも第十三の月は不吉な感じがする、赤い瞳をした子は不気味な感じがする……俺さ、近いうちにルークとセルからは離れるべきかなって、実は少し思ってたんだ。じゃないと、何かと迷惑をかけることになると思っただからさ」

「どうして、ですか？わたしが……いえ、ぼくが……………」

ルークが慌てたように言葉を直すのを見て、シンクは優しく微笑った。

「<ぼく>でも<わたし>でも、どっちでもいいんだよ。これは俺だけじゃなくて、セシルの奴もそう思ってることなだけどさ。ルークが男でも女でも、名前が仮にルークじゃなくても、俺にはどっちだっていいし、セシルだってそうなんだ」

このことは流石に、ルークにとつて衝撃的だったのだろう。

彼女は暫く言葉を失くしたまま、ただ薄青い影の中で、凍りついたように微動だにしなかった。

「俺もさ、悪かったって思ってる。<踊る小鹿亭>で、ほとんど強引に一緒に連れていけって言ったようなもんだからな。ルークにとつては迷惑なことだっただろう。でも俺、自分の目玉が赤いつてことに関しちゃ、すっかり被害妄想患者みたいになっちまってるから……ルシアス神殿の神官さまでも流石に、マゴクなんかと一緒にいるのはキツイのかなって思った。それでついて来ないでほしいって遠回しに断ろうとしてるのかなって思ったりもしてさ」

「そんな、そんなことは関係ありません。わたしはただ……」

ミュシアは、自分なりに「こうしたほうが男らしい」と感じられる話し方を意識的にしているつもりだったが、今はもうそんな演技をする気力さえ、彼女からは失われてしまっていた。

「本当のことがわかると困るって、ただそう思っただけです。でも、せめて王都カーディルへ行くまでだったらって、みんなにだけじゃなく、自分の心にも嘘をついて騙そうとしたのかもしれない。ずっとひとりで旅を続けるよりも、誰かが一緒にいてくれたほうが、絶対に心強いし……でももし本当のことがわかったら、ふたりとも自分のことを軽蔑するだろうってわかっていているつもりでした。だけど、セシルさんやシンクノアが優しいのをいいことに、つい甘えてしまつて……」

「べつに、軽蔑なんかしないさ」

不意に、月の光が外で強まり（あるいは、雲の陰から月が顔を出したのかもしれないが）、厩舎の中を金色の灰明るさで満たした。シンクノアはその時、自分の隣にいる神官の横顔が、端整で実に美

しいのを見てとった。

男と思えば男にも見えるし、女と言われれば到底男であるとは思えないような、どこか中性的な顔立ちだった。だが、彼 いや、彼女にはどこか人を寄せつけない強さがあると前から思っていた。汚れた手で触れれば文字通り本当に火傷をしそうな、それは一種の神々しさに近いものだったが、そのような神聖なものを一体誰が軽蔑しうるだろうと、シンクノアにはそんなふうに思えてならない。

「俺はさ、あんたのことが好きだよ、ルーク。あんたの迷惑にさえならなければ、これからも一緒に旅を続けたいと思ってる。センプルが今日機嫌悪かったのは、きのうの夜に蒼の魔導士さまでもおしっこちびりそうな魔物が現われたっていう、そのせいだからな。さっき、センプルはルークに『何か隠していることがあるだろう』って詰問したけど、その前にあいつ、俺にもまったく同じ口調で同じ質問してたよ」

ここでシンクノアは、明るい声で笑った。

「センプルの奴は、ルークが最初から女だってわかってたんだってさ。それで、女の一人旅っていうのは何かと危険だろうと思って……それで、一緒について来ることにしたんだと。あいつも何かっちゃあ、おっもしろい奴だよなあ。三百年生きてるとか言ってる割に、ちょっとしたことですぐ切れそうになったりさ。俺がもし百まででも生きたら、あいつよりはまだしも気が長くなってると思うんだがな」

「えっ！？最初からわかってたって、どうして……」

雪白の肌が、月光の下にも朱に染まるのがシンクにはわかった。

それを見て（あーらら）と、シンクノアは内心思う。こんなにもわかりやすい子ときのう一日馬に乗っていて、センプルがもし何も感じないのだとしたら あの魔導士はその部分だけが年相応にジジイなのではないかとしたか、シンクノアには思えない。

「まさかとは思いつけど、きのう一緒に馬に乗っててそれで気づかれたとか、そんなふうに思ったわけじゃないだろ？」

「ち、違いますっ！！でも、最初からわかってたなら、どうしても

「っと早く……」

ルークは真っ赤になった顔を、両方の手で包むようにして隠している。シンクノアとしては、もしセルとルークが恋愛的な意味でうまくいきそうなら……その場合にも姿を消そうとは思っていたが、あの頑固な石頭の魔導士が相手では、今のところ、自分が間にいたほうがいいのかもしれないと初めて思った。なんというのだろう、ある種の緩衝材のような存在として。

「ルークはさ、シンクノアのことを好きなんだろ？ 巫女って、外の世界で他の男と結婚したりしちゃ絶対駄目なのか？」

「わ、わたしはルシア神殿の巫女として、終生誓願を立ててるんです。ですから、それを人間のわたしの意志で取り消すということは絶対に出来ません。わたしはセルさんのこともシンクノアのこととも人間として好きだと思っています……ただ、その、セルさんに対してはわたし、たぶん 小さい頃からの癖が出るのかもしれない。でも本当にただ、それだけなんですっ!!」

「小さい頃からの癖って？」

（本当に可愛い子だな、まったく）と思いつつ、火照った顔を両方の手で挟んだままでいるルークのことを、微笑しながらシンクノアは横から見つめた。

「つまり、その……神殿には姫巫女さまを初めとした、美しい巫女たちがいらっしやあって、わたしは小さい頃から彼女たちに強い憧れを持っていました。時々、神殿の敷地内のどこかでお姿を見かけることがあると、暫くの間ぼうつとしてしまったり、巫女さまたちはとても美しくて……わたしが巫女見習いとしてお仕えた巫女さまも、本当にお綺麗な方でした。あの、なんていうかわたし、いつも横にそうした自分が憧れとする方がいたものですから、セルさんのこともつい、そんなふうに思っただけだと思いません。でも本当に、恋とかなんとか、そんな恐れ多いことではないんです」

（恐れ多いねえ）

シンクノアは心の中で肩を竦めつつ、それ以上のことをルークに追求するのはやめることにした。彼女はたぶん　その憧れの対象が同性ではなく異性だったら、それが<恋>と呼ばれるものになるということ、まだ知らないのだろう。

そんな純粋な娘に、下品な詮索をしようなどとはシンクノアも思わないし、何より、そろそろ体が半分くらい冷えてきた。寒村育ちのシンクノアにとって半分ということは、ルークにとってはそれ以上だろう考え、彼は立ち上がるとルークに向かって手を差し伸べた。「さてと、そろそろ寒くなってきたし、宿のほうへ戻るとするべか」
「で、でも、わたし、センルさんの前で、これから一体どんな顔をすれば……………」

シンクノアの手をとって立ち上がりながら、ルークはまた半分泣きそう、不安定な感情の揺れる顔つきをした。

「うーん、そうだな。とりあえず今日はまあ、とにかく二階に上がって寝たほうがいいかもな。センルには俺から、「ルークにわかってたってことを話した」ってことを話しておくから。あいつはルークが女だったから用心棒よろしくついてきたんであって、もしあれでルークが男だったら、今一緒にいなかったかもしれないんだぜ？だから、そういう意味でもあいつにとってはルークが女が男かっていうのは、もともと重要じゃないわけ。これでおわかりになったかな、お嬢さん？」

「でもわたし……………ずっとふたりに嘘をつきながら、いかにも正道をとく神官のように振るまっついていて、そのことがわたし、なんだかとても恥かしくて……………」

馬小屋をでる前に、シンクノアは囲いの中にある栗毛の馬二頭の鼻づらを撫でてやることにした。二頭とも、とてもいい馬だ。もしセンルが明日馬を買うつもりなら、こいつらがいいんじゃないかとシンクノアは思いもしたが、何分金をだすのは彼なので、センル自身言っていたとおり、彼が自分の目で見て納得したものを買うほうがいいのだろう。

「ま、そう深く考えなさんな」と、馬小屋の木戸を開けながらシンクノアは言った。「明日の朝はまた、なーんもなかった顔をして、「わたしは男です」っていう振りして、いつもどおりにしてたらしいのさ。実際、ルークが平民の女の格好して旅を続けるとしたら、それはそれで大変なことになりそうだからな。セナルは蠅叩きを持ってしょっちゅうピシャピシャやってなきゃならないだろうし、どつかの宿屋に泊まるたびにイライラメーターが上がりっぱなしになるだろうよ。でもまあ、さっきみたいに三人きりで一間の部屋にいるような時は　ルークはルークらしくしてたらしいのさ。そういえばあいつ、前に言ってたぜ。ルークが男の振りをしてるってことは、相当気を遣って疲れることなんじゃないかって。その部分を俺と自分が減らせてやれば……みたいにさ。石頭で頑固でイラチだけど、そう考えるとやっぱ、結構いい奴だよな、セナルって」

「セナルさんが、そんなふう……」

ルークが不意に黙りこんだので、シンクノアもまた両方の手を頭の後ろで組んで、月を見上げるようにしながら村の通りを歩いていた。<銀のめんどり亭>の屋根のてっぺんには風見鶏が踊っていたが、それほど大きな強い風はなく　旅馴れたシンクノアは風向きや雲の流れ、月や星のかげなどから、明日はどうやらない天気になりそうだと、そんなふうに感じていた。

ルークとシンクノアが<銀のめんどり亭>へ戻ってみると、出てきた時にカウンターにいた客の姿は消えていた。

おかみの姿もまたなかったが、かわりに禿げ頭の亭主がジョッキを掲げて、ふたりに「どうも、どうも」とよくわからない挨拶をして寄こす。

「じゃあな、ルーク。おやすみ」

「おやすみなさい」

ペこり、とどこか礼儀正しくお辞儀をしてから、ルークは階段をゆっくり上っていった。その姿を少しの間見守ってから、シンクノ

アはセシルの待っている部屋のドアを開けたのだが　まさかここまで険悪な顔をして天才魔導士さまが自分のことを出迎えようとはシルクは思いもしなかった。

「……それで、どうなったんだ？」

「どつつてのは？」

暖炉の脇、自分のベッドから手を伸ばして取れる距離のところ、シルクノアは剣を立てかけた。それからベッドサイドに腰かけ、本当は今すぐにも眠りたいであろう、魔導士殿の相手をするにすることにする。

「まあ、あの娘が一緒に戻ってきたということは、うまくいったと考えていいんだろうがな」

「そうっすね。そのとおりっすよ」と、シルクノアはいつものようにお調子者を装って言った。「ほーんとにあの子、あんなに純粹で大丈夫なんスかね、旦那。俺とあんたが軽蔑したらどうしようって、そんなことが心配だったんですとき。もう顔なんか真っ赤にしちゃって、ぐすぐす泣いたあとで、「セシルさんにこれからどんな顔すれば……」とか言われちゃいましたよ、俺。ま、いつもどーり普通にしたりやあいんじゃないかって言っとききましたがね。蒼の魔導士さまにその気がないんですしたら、俺が間違っつて馬屋で押し倒してるところでさ、旦那」

「こういう時に、面白くもない冗談を言うのはよせ」セシルはシルクノアをギロリと睨んで言った。寝不足のせい、青い瞳が血走って見える。「それで、どこまで聞き出した？邪霊どもが騒いでも不思議のない、<鍵>とか何かそういうものを持っていると言っていたか？」

「あ、それは聞きませんでしたわ、旦那」と、シルクノアはてへつと言っつように、自分の頭を平手で叩いた。「だつてさー、そこまで急に突っこんだこと聞けます？向こうは自分が女だつてバレたと思つて、すんげえ動揺してるんスよ？とりあえず、ルシア神殿にいたつてことは確かなんじゃないスかね。それで、巫女見習いをしてて、

自分の仕えてた巫女さまってというのがすんごく綺麗な人で……」
「巫女見習いだと？」

ある程度そうしたことを推測してはいたものの、あらためてそのことがはつきりわかった途端、セシルは驚いた。いや、驚いている自分に驚いた、というべきか。巫女見習いといえば、次期に巫女になる可能性の高い、そうなるまでもに相当な倍率をくぐり抜けてようやく<神意>によってなれるものだと聞いているだけに……やはりこのことの裏には何かがあると、セシルはそうはつきり確信した。
「そんでですね、自分がセシルさんのことを好きなのは、そういう美しい巫女さまたちを横で見えたから、つい同じようにロールモデルを求めて……」って、聞いてますかね、旦那？人の話」

だが、セシルはもうシンクノアの話など聞いていなかった。彼はベッドに横になると、無駄に睡魔と戦いながらこう考えていた。別にわざわざ盗み見ようと思っただけではないが、セシルはルークの荷物の中に<鍵>と思われるような、それらしきものなど何もないと知っていた。となると、一番可能性として高いのは、彼女の体の中になんらかの形で<鍵>が移植されているということだろう。つまりは、ルーク自身が生きた鍵そのものなのだ。

（くそっ！こんなに眠くもなければ、今すぐ二階へ行って、洗いざらいすべて話させてやるものを……）

そう思いながらセシルは、泥のような睡魔との戦いに破れ、やがて静かに寝息を立てはじめた。シンクノアが振りではない本物の大いびきをかいていたことには、幸いなことにまったく気づかないくらい、彼は翌朝までぐっすり休むことが出来たのである。

翌日　きのこのまずい夕食に続き、それ以上にパツとしない朝食を終えると、三人は<第？（イゼル）の刻>になる少し前に、<銀のめんどり亭>を出ることにした。

朝食のほうは、店のカウンターではなく、昨夜と同じくシンク

ノアとセンルの部屋でとることにしたのだが、その場でセンルは、ルークに特別何も聞いたりしはしなかった。何より、事が自分で考えていたよりも重大らしいと気づいた彼は、相手がど田舎村の住民であれ、このことに関してこそりとも物を聞かれるのは危険だと考えたのである。

だが、<銀のめんどり亭>の亭主が紹介してくれた馬屋の親父とというのが実に頑固で、仮に一頭につき三十シエケルもらったとしても、馬を売る気はないと言い張った。馬上ですぐにも、自分の知りたいことをすべて聞くつもりであったセンルとしては、これは大きな計算違いとなることである。

「そうか。ではここにクラウン金貨が五十枚ある。シエケルに直せば百シエケルだ。これであの栗毛の馬を二頭、譲ってもらえないかね？」

イラチの魔導士センルとしても、ここは我慢のしどころだった。何分、きのうぐっすり眠れた上、夢の中でさえ邪霊に悩まされなかったお陰で、彼は今、普段よりは若干気分が良かったのだ。

「へっ！クラウン金貨なんぞクソ食らえだっ！！こつただ金、ここいらじゃ使わねえって、あんた方は知りなさらんのかね？わしらは土地でも家でも、大きなもんを買う時には、シエケルで交換するって慣わしよ。馬だつてそうさね。クラウン金貨なんぞもらつたって、温泉町のリディマか王都カーディルに近い町くらいまで行かねえと、ここいらじゃ実用性なんかねえのよ」

クラウン金貨というのは、カルディナル王国では一般に貴族階級の人間しか使わない貨幣である。シエケルというのはクラウンよりもひとつ下に当たる通貨で、1シエケルには50レーテルの価値があるとされる。平民や農民などは大抵家屋などを買う時でも、シエケルで決済するのが普通であった。

センルとしては、これだけの金に心を動かさない人間がいて嬉しい反面、シンクノアが言うところのイライラメーターが徐々に上がってきてもいた。結局のところ、金の問題ではなく馬主は馬を手離

したくないのだろうと思い、セシルは諦めることにしたわけだが、
他を当たってみても、まったく同じように馬を売ってくれそうな
村人には出会えなかったのである。

その理由が何故なのか、五軒目の家で、セシルにもようやくわか
った。その厩舎の持ち主が、セシルたちが馬房を出ていきしな
ばそりとこんなことを呟いていたからだ。

「誰が好き好んで、マゴクなんぞに物を売るもんかね。そんなこと
をしたら、末代まで祟られちまうわ」

当然、この一見純朴そうに見える中年農夫の言葉は、ルークの耳
にもシンクノアの耳にも届いていた。シンクノア自身は、大して気
に留めてもいなかったのだが（というのも、これが彼にとつての「
普通」であったので）、もうこのままナムル村の出口まで道を歩い
ていくしかないように思われた時　突然、ルークがぴたりと立ち
止まり、大声で宣言するようにこう言い放ったのである。

「馬なんてなくっても、このまま歩いていきましよう！次町へ
辿り着くには、10エリオンもないんですから。とっとと歩いて
いけば、正午前には着いてしまいます、きっとそうです！！」

そう言うなり、ルークは怒ったような顔をして、ひとりずんずん
歩いていった。

そんな様子の彼女を見て、セシルとシンクノアは、思わず顔を見
合わせて笑ってしまう。

「自分で言っていたとおり、本当に貴様はいい疫病神だな」

「ははっ。この程度で済むくらいなら、まだいいほうだぜ。あんだ、
あのく銀のめんどり亭のおかみが泊まらせてくれなかったら……
二晩続けて野宿で、今ごろ寝不足のあまり、眉間の血管から血が飛
び出してるだろうよ」

「それをおまえが言うな！」

セシルはそう言って、手に持ったオークの杖で一瞬地面を穿った。
シンクノアはといえば、頭の後ろで両手を組んだまま、隣にいる
三百歳の魔導士の、イライラした顔の表情を面白そうに眺めやるば

かりである。

(なんにしても、旅の仲間ってのはいいもんだな)

呑気にそんなことを思いながら、天高く馬肥ゆる秋の空を、シンクノアはじつと見上げていた。

第3章 白蛇女王の館

ナルム村を出て以降、一行の旅のペースはゆるやかなものになった。大体次の町や村へ辿り着くのに 30エリオン以上離れているということはなかったため、馬がなくなると徒歩でも、日が暮れるまでに辿り着けないような場所はなかったたのである。

そこでセンルとルークとシンクノアの一行は、王都カーディルまで行き着くのに、約三か月ほどもかかってしまった。というのは、道程の町や村で色々な事件に引っかけたせいもあり、場所によっては半月ほど逗留したこともあったからである。

第一の事件としては、山間にある洞窟に魔物が住んでおり、そのせいで隣村同士の行き来が閉ざされ困っている……というのが、<ルアーガの鬼蜘蛛退治>という事件であり、この時初めてセンルは、シンクノアの剣の腕前がどの程度のものであるのかを知った。

ルアーガというのは、カーディルの言葉で「熊の巣」を意味している。つまり、村人たちが熊が冬眠するのに使っていると思いでいた洞窟に 一つの間にやらく鬼蜘蛛>という名の魔物が住みついていたのである。鬼蜘蛛は巨大な蜘蛛のような姿をしており、口から粘液を吐いて動物や人間を絡めとると、生きたまま貪り食べるといふ、肉食の魔物だった。

センルとしては最初から特にシンクノアの剣の腕前のほうには期待していなかったのだが(というより、彼がどの程度の剣の使い手なのかということすら、考えてみたこともなかった)、自分ともし直接対決した場合、おそらく無傷ではいられまい、というくらいの脅威を感じた。

つまり、センルが呪文を唱えて発動させる前に、すべての事の決着は着いていたのである。センルにはその太刀筋を見分けることさえ出来なかったが、シンクノアが細身の剣を抜くか抜かぬかの間に……鬼蜘蛛の巨体はまず胴と頭が離れていた。それから一瞬間を置

いて、足がすべてバラバラになっていたのである。

「こいつは、頭を潰しても胴体だけで動くし、足に生えてる毛に毒があつてな、捕まえられると痺れて暫く動けなくなるんだ。暫くなんて言つても、その動けない間に喰われちまつてる公算が高いわけだけだな」

「……おまえ、この種の仕事をよく請け負うのか」

火炎魔法によつてまずは口を塞ごうと考えていたセシルは、あまりに呆気なく片が着いたのを見て、シンクノアに対して感心しないわけにはいかなかった。ルークは光の精霊魔法を使つて洞窟内を明るく照らしていたが、あまりにグロテスクな魔物の屍骸を前にして、驚いたのだろう……暫く口すら聞けないまま、ただ呆然としていた。「まあ、話としては、セシルの闇の魔導士退治つていうのと、少し似てるのかもしれないな。こういう汚れ仕事はマゴクが御専門つてな感じで、話があれば当然割高で請け負うよ。じゃないと、こつちも暮らしていけないからさ」

「なるほど。そういうことか」

ナルム村を出たあと、当然セシルは、ルークの本名や彼女自身が生きた<鍵>そのものではないかということまで、色々と質問攻めにしたのだが、シンクノアはそれを途中で止めさせていた。「そういうのは、やめにしようぜ、兄弟」と、彼は道の途中でそう言い、セシルの肩をぽんと叩いたのである。

「……私とおまえが、一体いつから兄弟になつた。気色の悪いことを言つなっ！」

「だつてさ、ミュシアちゃんもおまえに一気に色々聞かれて困つてるじゃん。あんたさあ、もう三百年も生きてるんだろ？それで、生まれはどこですかとか、三百年生きてもその若さで、どんなことでも一番お困りですかとか、聞かれて嬉しいか？むしろ途中で、いいかげんぶつ飛ばすぞ、このトウヘンボクがっ！！てなるのが普通なんじゃねえ？だからそう、こんな可愛い子を一気に追い詰めるような真似すんなつて、俺は言いたいわけ。おわかり？」

確かに、シンクノアにそう言われて、ルーク……いや、ミュシアが困り果てたような顔をしていることに、セシルは初めて気づいた。どことなく、怯えきったうさぎのような顔の表情すらしているように見える。

以来、ミュシアが第四の緑柱石の巫女だったこと以上に、セシルは詮索するのをやめているわけだが、知識欲が旺盛なセシルとしては、最後の姫巫女リリアが託したものの意味について、早く知りたくてならないのだった。

「あの、本当にわたし、わざと隠してるってわけじゃなくて……その<鍵>ってというのがなんなのか、よく知らないんです。だから、世界最大の図書館っていわゆるカーディル図書館へ行けば、何かわかるんじゃないかって、そう思ってた……」

ミュシアのその答えを聞くと、今度はセシルが黙りこまねばならなかった。何故と行って、おそらく王都カーディルへ行けば、本を調べる以前に<生きた知恵>を持った魔導士たちがいるので、もしセシル自身がうまく渡りをつけれれば、ミュシアがこれからどうすればいいのかを、教えることが出来るかもしれないのである。

また、それと同時に、自分とシンクノアが実にその身分の危うい人間を守っているのだということに、セシルは初めて思い至っていた。つまり、姫巫女の間で代々継承されてきた<鍵>が今現在彼女の体内にあるということは、ミュシア自身が本当の意味での生きた最後の姫巫女ということになるだろう。

もし、政治的野心を抱いている人間が彼女に近づき、姫巫女リリアが次の姫巫女を指名して逃がしたからこそ、リリアは自ら命を絶ったのだと世間に公表された場合……おそらくミュシアは、多くの人間から命を狙われることになるに違いない。ミュシア自身はその可能性にまるで気づいていないようだが、ルシアス王家は現在、どうやら<遷都>を考えているらしい。暗黒竜に踏み穢されて焦土と化した大地を復興させるよりも、ルシアス王国の第二の都といわれるルベリオンか第三の都として栄えるルクシンドラへ王家をお迎え

してはどうかということが、現在審議検討中であるらしかった。

もしそこへ、姫巫女がその証拠となるものとともに御存命であられる……などということが世間に知れ渡ったら、一体どうなるだろう？そもそも、王族を初めとした諸侯はみな城の中へ逃れていて無事だったということ自体、少しおかしな話ではないかと、センルは前から思っていた。ルシアス王家というのは、聖竜の末裔の血を継ぐ者として姫巫女ほどではないにしても、世間ではそれなりに人気のある存在である。だが、噂によると（といっても、ミュシアの口から直接それが本当のことであると知った今、センルにとってそれは真実となつたのだが）、ルシア神殿の姫巫女は、女王や王である者とすら、俗世にある者として顔と顔を合わせて話をするとはしないらしい。つまり、執政のことに關して何か神の託宣が欲しい場合は、御簾ごしに会話をし、姫巫女自身は女王の前にも王の前にも決して姿を現したりはしないのだという。

よくそれで、千年以上も治世が持つたたとセンルはつくづく感心するが、ルシアス王家が長い間ルシア神殿のある方角を、王城から疎ましく眺めていたとしても、まったく驚くには当たらないだろうという気が、センルはする。これもまた噂によればということなのだが、王家に収められる税金よりも神殿税のほうが遥かに大きく上回るということだし、その税を自分がうまく操れる巫女をその地位に就けることで自由に出来るとしたらどうだろう？センルには、そのような計画がルシアス王国の現女王を中心に押し進められているのではないかという気がしてならなかった。

つまり　カルディナル王国の王都カーディルで、最初センルがしようと思っていたのは次のようなことだった。国の最高魔導士であるプリンク以下、高位の信頼できる魔導士たちに自分がヴァリアントと出会ったこと、また彼が<鍵>と呼ばれるものを探し回っているらしいこと、それからそれが何を意味しているのか、自分の手には余る問題について彼らに訊ねてみるとつもりであった。

だが、そのためにはミュシアがルシア神殿の姫巫女としての継承

権を保有する者であることを、彼らに明かさなければならなくなるだろう。セシルは闇の魔導士退治が嫌になり、破門されたも同然の身分であったので、カルディナル王国の政治事情については今もいまいち疎いという実情がある。

ゆえに、話をする相手はつくづく慎重に選ばなければならぬと考えていた。もし、カルディナル王国に姫巫女が逃れて御存命中であるということが世間に知れ渡れば、おそらくその後は戦争になるということも、十分考えられるのだから。

「シンクノア、おまえ……あの子のために、命を捨てられるか？」

ひとり、頭の中で同じことを繰り返し考えるのに嫌気が差し、シロンという名の町にいる時、セシルは眠る前にそうシンクノアに聞いていた。

「命、か。そういうあんたはどうなんだ？」

その時に宿っていた瞳の色によって、シンクノアにはそれが出来るだろうということが、セシルにははっきりとわかった。

「前に、ハーフェルフの百年は、人間にとっての十年みたいなものだって、言っていたことがあったろう？それでいくと、セシルは命さえあれば、これからもずっと長生きができる……つまり、せいぜい百年くらいしか生きない俺たち人間の命が、セシルには十個以上詰まってるってことだ。それなのに、その命をつまらないことで落としたくないと思うのは当然のことのような気がする。でも俺は

昔はさ、もう一度アイリに会えるまでは絶対に死ぬものかと思っただっていうこさえわかれば、別に明日死んでもいいんだよな。あの子は……ミュシアは、俺が自分のクズみたいな命を捨てて守る以上に、充分価値のある子だと思う。そしてミュシアのほうでも、俺かあるいは俺じゃなくても、だ。クズかカス程度にしか感じられない人間のためにも、あの子は命を投げだすだろう。それがわかるから、俺はあの子のためになら命を捨てられる気がするんだ」

「そうか。だがな、私自身のことに関して言えば、逆の考え方もで

きるんだぞ？すでにもう三百年も生きたということは　普通の人間の生命、三個分以上の人生を送ったことにもなるわけだ。それで、魔導士センルもそろそろ年貢の納め時っていう時が来たら、残りの寿命のことなど考えてもいられまいよ。おまえが身に沁みて知っているとおり、長生きするばかりが幸福とはいえない。私は生まれ変わりと聞いたものを特に信じているわけではないが、もし来世というものがあつたとして、シンクノア　次はどんな瞳の色でも選べるとなつたらおまえ、どうする？」

「ははは」と、シンクノアはどこか愉快そうに笑つた。「俺は次の人生なんて、考えてみたこともないな。だけど赤い瞳だけはごめんだ、ということも出来ない。人間つてのはまったく深い生き物で、俺のことをマゴクと呼んで忌み嫌う人間がいる反面……アイリやミュシアやセンルみたいに、そんなことをまるで問題にもしない人間つていうのが存在するからな。俺はミュシアみたいに特に信仰深いわけではないにしても、時々神さまつていうのが天から見ていて、本当に価値のある人間とそれほどでもない人間を選別してるんじゃないかと思うことがあるよ。あの子は差別意識のない本当にいい子だ、魂の財産としてプラス五点とか、何かそんなふうになさ」

「だが、それでいつたら、赤い瞳で苦労しているおまえ当人は一体どうなるんだ？」

「俺か？センル先生、俺にはそれがまったくわからないんだよな。シンクノアくんは、たまたま第13の月に赤い瞳で生まれちゃつて可哀想でちた。だから百点満点……なんていうのが神とかいう奴だつたら、俺はそんな野郎のことは速攻ぶっ飛ばしてるだろうからな」

そこで、センルとシンクノアが互いに声を合わせて笑つていると不意に、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。ふたりは、てつきり相手がミュシアに違いないと思つていたのだが、「どーぞー」というおちゃらけたシンクの声に答えたのは、ミュシアではない、まったく別の女性の声だった。

「わたくしは、シロンの領主の城館に勤める、エノラと申す者です。

こちらに、ルシアス神殿にお仕えである神官さまがおられると聞いて参りました。我がシロンの娘と呼ばれるヤスミンカさまが、奇病にかかっておいでで……是非、治療をしていただきたく、こちらをお訪ねしたのでございます」

この種のことというのは、湯治町リディマを出て以来、幾度となくあつた依頼であつた。ルシアス神殿の神官としての印である青の僧服と、手に持った錫杖を目にするなり、信心深い老人などは、額を地にこすりつけんばかりにしてルークのことを拝むことさえあるのだ。

「えーと、ミュ……じゃねえ。ルークなら、別の部屋にいるけど、俺たちは彼とともに旅をしている用心棒つてところだ。用があるなら、上からあいつを呼んでこようか？」

「ええ。是非お願いします」

エノラという名の中年の女中は、切羽詰まつたような顔の表情をしており、シンクノアの赤い瞳を見ても、まったく動じずに、彼が脇を通りすぎていった時にさえ、敬意を払うように会釈していた。

これまで、大抵の人間がルシアス神殿に仕える神官さまともあろう方が、何故マゴクなどと一緒にいるのか……という視線に慣れていたセシルにとって、これはむしろ何かの良くないサインであるように思えて仕方なかった。

つまり、シロンの城主の娘のヤスミンカとやらは相当な重傷らしいと察せられるが、権力を持つ者の親族の病いを癒せなかつたらどうなるのか、セシルにとってはその点が何より気がかりだったのである。何しろ、リディマの町のリウマチ女性がそうであつたようにルークの癒しの祈りといったものは、即座にその場で効力が現われる場合と、そうでない時とがあるのだから。

シンクノアが二階の部屋で休んでいたルークのことを連れてくると、エノラはとにかくお嬢さまのことは見てほしい、その症状についてはここではお話できないというその一点張りだった。そこでルークが、「今日はもう遅いので明日の朝お伺いするというのではど

うでしようか？」と提案すると、エノラという侍女は「是非とも今宵のうち、一刻も早く見ていただきたくのでございます」と、今にも泣きださんばかりにしてルークに懇願した。

そこで彼女としても、これは相当病いが重いのだろうと考え、エノラの言い分を聞き入れたのだったが、この時、時刻は<第十一の刻>であった。双子月とともに三日月よりもさらに細くなっていたこの夜、シロンの城館へ向かうまでの間、道は暗いというよりもまるで黒く塗り潰されでもしたように先が見えなかった。

エノラとしては、ルシアス神殿の神官ひとりのみを屋敷まで連れていくつもりであったのだろう。まるで当然のように後ろから蒼の魔導士と赤い瞳を持つマゴクがついて来ようとするのを見て、彼女はとても当惑した様子だった。

「もしそれが伝染病か何かであるとしたら、ぼくひとりで……」とルークが言いかけると、いつものように「駄目だ！」とセシルが即座に反対した。

「何度言ったらわかる？おまえの体はもう、おまえひとりだけのものじゃ……」

そこまで言いかけて、ハツとしたようにセシルは口を噤み、それからこう言い直した。

「つまり、ルシアス神殿の神官さまの御身は、あなたおひとりのものではないということ、ルークさま」

この丁寧な物言いに、エノラは気を良くしたのかどうか、「さようでございますよ」と言つて、初めて微かに笑顔を見せた。

「ヤスミンカさまの御病気は、人にお移りするようなものではございません。そちらはこのわたくしが十分に請けあいますわ。何故とって、わたしはヤスミンカさま付きの侍女で、いつもヤスミンカさまのお世話をしているのですから……しかしながら、お嬢さまの寢室では神官さまだけがお嬢さまにお会いして欲しいのです。その点については、ご了承いただけますでしょうか？」

「まあ、俺は当然ヤスミンカさんに会わないほうがいいにしても」

と、シンクノアは隣のセナルのことを見返した。

「私はとても嫌な予感がしてならないんですがね、エノラさんとやら」

セナルは、先頭に立って角燈で先を照らす侍女に対し、仏頂面で続けた。

「もしそこに闇魔法が関わっていた場合、それはどちらかというところ魔導士である私の専門だと思つので。そしてその場合は、もしかしたらルシアス神殿の神官さまのお力を持ってしても癒されぬかもしれないのですよ。そう考えた場合、ヤスミンカお嬢さんはルークと私のふたりに会つたほうがいいと、そうお考えにはなられませんか？」

町の大通りを抜けてからは、坂道が続いた。シロンの町は、小高い丘に建てられていて、領主の城館はそのままも高い場所に位置している。そして砂石造りの古い城館の門をくぐつた時、セナルの中の嫌な予感は確信に変わった。

闇の魔導士や闇魔法に関わる何かが身近にある場合、セナルは仮に寒くない時でも一瞬肌が怖気立つのだ。侍女のエノラは、セナルが言つた言葉に対し、黙つて足早に坂道を上り続け、返答を保留にしていたのだが、屋敷の玄関口へ辿り着くなり、突然その話の続きをしはじめた。

「ああ、ヤスミンカお嬢さまの寝室は二階でございますわ。そのう……名のある魔導士さまにでしたら、すでにお嬢さまのことをお見せしたのです。ここから王都カーディルまでは、そう遠くはございませんからね。お嬢さまのために、なるべくお力のある魔導士さまをと、ヤスミンカさまのお父さま……つまり、ここシロン地方一帯の領主であるラディール卿は使いの者を走らせたのですよ。ところが、あの口の軽いへボ魔導士めが……」

ここでエノラは、今思いだしても腹が立つとも言うように、何度か玄関マットの上で足を踏み鳴らした。

「あら、わたしとしたことが……おほほ。なんにしても、そのへボ

魔導士めはお嬢さまの御病気をお癒しになれなかつただけでなく、シロンの領主の娘には白蛇の呪いがかかっているなどと、言い触らしてまわったのでございますよ。そのせいで、せつかく進んでいたエレアノール卿との縁談もすっかりぶち壊しになって、以来お嬢さまは生きる気力を失っておいでなんですの。ああ、以前はあんなにお美しかったお嬢さまがどうしてこんな目に……本当に、おいたわしい限りのことでございますわ」

エノラは玄関口に出てきた使用人の娘に角燈を渡すと、毛足の長い白い絨毯の敷かれた階段を、二階へ上がっていった。廊下は広く、このままどこまでも続きそうなくらい長くもあつたが、壁にかけられた燭台に明かりが灯っているだけでなく、あちこちの暖炉に火が入っているそのせいだろう、全体に暖かな空気が行き渡っているようだった。

セシルは廊下の壁に飾られた絵画や、大理石の彫刻品などを見て、これだけの贅沢のできる金持ち領主の娘が病気となり、不名誉な噂話を流されたとあつては、これ以上の屈辱はおそろくなかつたらうと想像した。エレアノール卿との縁談だけでなく、果たして他の身分ある貴族ともこれから結婚できるかどうか……もしその白蛇の呪いとやらが闇魔法に関わるもので、領主の娘ヤスミンカ自身が何かのく取引>に関わっていた場合、今も正気で命があるだけでも儲けものだという可能性もあることを、セシルはよく承知していた。

「あの、少々こちらでお待ちになってくださいませ。ヤスミンカお嬢さまに心の準備をしていたただかなくてはなりませんから」

ヤスミンカが休んでいるという部屋の向かいに応接室があり、そこでも暖炉に炎が燃えていた。シンクノアはここからは自分は邪魔になると判断したのだろう、片方の扉が廊下に向かって開け放たれている応接室の中へ姿を消した。

「まあ、ルシアス神殿の神官さまが本当に来てくださるだなんて！」
胡桃材の茶色いドアの向こうからは、病気とはとても思えないような、若々しくて明るい声が聞こえてきた。

れてきたへボ魔導士が白蛇の呪いと呼んだのも、案外外れていなくはない。この鱗を砕いて粉末状にしたものを飲み続けると、今のあなたのように取り返しのつかないことに……」

「見ないでえっ！わたしを見ないでえっ！！」

両方の手で顔を覆い、まるで蛇のようにヤスミンカが体をくねらせていると、ベッドの前に腰掛けていたルークが立ち上がり、怖い顔をしてセナルのことを睨みつけてきた。

「セナルさん、出てってくださいっ！！ここは若い女性の寝室なんですよ！」

そう言っつて、セナルを突き飛ばして外へ出ていかせると、ルークはバタンとドアを閉めていた。暫くの間ヤスミンカの噁り泣く声が廊下の隅々まで聞こえていたが、こういうことがよくあるのかどうか、使用人が二階に上ってくるような気配はまるでない。

「やれやれ。セナル大先生の博識も、若い女性の前ではけんもほろろだな」

「うるさいっ！！」と言いつつ、セナルはシンクノアが空中に放った白い鱗を受けとった。

「大方、これを飲めば肌が美しくなるとかなんとか、怪しい商人にでも売りつけられたんだろうよ。まったく、よくある手なんだがな……これに引つかかる女性というのは、数に限りがない。あいつらはもう自分たちに明るい未来がないので、それを持つ人間の未来を台無しにする以外楽しみがないんだろうよ。シンクノア、おまえ『欲望のなる樹』っていう話を知っているか？」

「ああ。まあ、有名な民話だよな。子供でもみんな知ってるような……」

腕を組んだまま、シンクノアは廊下の壁にもたれて言った。

「ええと、確か　ある村に<願いごとの叶う樹>が生えていて、みんながそこをお願いごとをしにいった。心の清い人間がお腹をすかせてそこに食べ物を取りにいくと、西瓜とか蜜柑とか、とにかく食べたいものが生っている。他には新しい鍬が欲しければ、古いの

を地面に埋めておくと、次の日には新品の鍬が樹に生つていとう寸法なわけだ……ある日、貧乏で結婚できない若者が、いい嫁さんが欲しいと願うと、我慢強いべっぴんの嫁が樹になっていた。それを見ていた腹の黒い男が、自分の女房を殺して土に埋め、新しい美人の嫁が欲しいと願う。次の日に「願いの叶う木」には確かに美人の嫁が生つていたのだが、そのべっぴんの嫁は次第に腹の黒い男を苦しめるようになった。その他、その男が金のヤカンが欲しいと願えば、そのヤカンには穴が開いてるし、とにかくそんな調子でその願いの叶いごとはちゃんと叶えられた試しがなかった。だが、他の人間たちが相も変わらぬいい物を引き当てるのを見て嫉妬した男は、最後に、その樹に斧を当てて倒してしまふんだな。村の人々は願いの叶う樹がなくなったことを悲しみ、腹の黒い男と強欲な女房を殺すと、もと樹のあった場所へ埋めたくて話だ。終わりの言葉は、「このふたりが埋まった地面からは、その後なんにも生えて来ませんでしたとさ」っていう、なんとも救いようのない、暗い話だよな」

「そうだ。闇魔法に関わった連中っていうのは、それと同じ運命を辿るってわけさ。自分だけでなく、他人をも不幸にするっていう負の連鎖が延々と続いていき……一度闇の側へ落ちた人間っていうのは、他人を不幸にしたり呪うこと以外に興味がなくなっていくらしい。正確には、自分と同じ不幸を持つ人間を増やすことしか、なすべきことがなくなるってわけだ。私が魔法の手ほどきを受けたカーデル王立魔術院では、教師のひとりがこんなことを言っていたよ。闇魔法に傾倒する人間が増えると、やがて世界を癒す樹が枯れて、一本も生えない状態になるってな。だからそうなる前に向こうの勢力をある一定のところまで食い止めなければならんわけだが……おまえ、ここに来るまでに感じなかったか？」

「ああ、感じた」と、シンクノアは重い溜息とともに答えた。「困まれているな。城館に勤める使用人のうち、何人かは間違いなく魔の物だと思う。もともと人間なのか、それとも魔物が人間の振りをしているのかは判然としないが……問題なのは」

シンクノアはそう言って、扉の向こうに再び耳を澄ませた。話声が急に止んだのである。セシルはすかさず、重いドアを開けようとしたが、鍵がかかっていた。

「くそっ！」

セシルが口の中で<開錠>（ラ・シエント）の呪文を唱えると、鍵の回る音が聞こえるのと同様、シンクノアがそこに肩から体当たりした。

そこでは、二匹の白い蛇が暖炉の炎を受けて、壁に影を不気味に伸ばしているところだった。気を失ったミュシアが、一匹の白蛇おそつくエノラに抱えられ、もう一匹の白蛇が二又に分かれた赤い舌をだし、彼女の体を味見するようになめている。

『残念ダワ……アトモウ少シダツタノニ』

『やすみんかサマ。セツカクノ上等ナ御馳走ヲ諦メナイデ。ワタシタチデ半分コニシマシヨウ。ワタシタチデ半分コ……』

『ソウネ！ソウスレピアノノ方モキツトオ喜ビニナルモノネ！！』

本体よりも影のほうがぐっと大きくなり、威圧するようにシンクノアに牙を剥いてきた。鬼蜘蛛を倒した時同様、一瞬で蹴りがついたのは良かったが、首を斬り落とされたあと、大蛇の首が黒い何かに変わり、次にそれが無数の虫になってあたりを這いずりまわった。

「うわっ！！なんだ、これ……っ！！！」

「しっかりしろ！ただの幻術だ！！」

セシルが火炎魔法を唱えると、暖炉の炎が白蛇エノラの体に燃え移った。その炎の力にヤスミンカも驚いたのだらう、シンクノアの幻術がとけた。

「うあ〜っ。気っ持ちわりい〜！！危うくもう少しで、口の中にゴキブリが入ってくるところだったぜ！！」

『やすみんかサマ、助ケテ。やすみんかサマ……』

体をくねらせながらエノラは、まるで捧げものでもするように、ヤスミンカに向かってミュシアの体を持ち上げたが、白蛇のヤスミン

ンカがクワツと口の顎を外して獲物に襲いかかろうとした瞬間

今度こそ本当に、シンクノアの剣がヤスミンカの舌を引き裂き、そのまま喉から内蔵に至るまでを真つ二つにした。

これで勝負はついた、とシンクノアはそう思い、ミュシアを抱き上げたセンルとともに部屋を出ようとしたのだが、二匹の白蛇はそれで死んだというわけではなかった。ふたりは脱皮するように新しい体を作り上げると、ふたつの頭を持つ大蛇となり、三人に向かつて再び牙を剥いてきた。

「おい！あいつら不死身かよ！？」

泣きごとを呟くシンクノアと一緒に廊下を走りつつ、センルは左右の部屋に鋭く目を走らせていた。ミュシアの体であれば、重力魔法をかけて軽くしてあるので、何も問題はない。だが、センルにとってこの時一番問題だったのは、どこにあの二匹の蛇の〈本体〉の元があるのか、ということだった。

それを潰さない限りは、無限に増殖する化け物と空を切るような拳闘を続けなければならないことが、センルにはよくわかっていたのだ。

「シンクノア、屋敷の火をすべて消すぞ！！」

「ええっ！？そんなことしたら……まあ、天才魔導士先生の仰せとあっちゃ仕方ねえな！あんたの好きにしろよ」

センルが炎を消す消火呪文を唱えると、まずは廊下の燭台にあった火がすべて消えた。それから暖炉の火も、すべて水を浴びせられたように突然消し炭になる。

「アアアッ。助ケテ、えのら。ワタシ、目ガ見エナイ。暗イノ、怖イ。怖イノ、イヤ。えのら、えのら……」

「やすみんかサマ、シツカリシテクダサイ。えのらハココニオリマス。イツデモ、やすみんかサマノオソバニ……」

二階の部屋の炎が消えた間に、センルは一階でミュシアの顔をはたいて、彼女のことを起こそうとした。彼女に光の精霊魔法を唱えてもらってからでなくては、一階の部屋の炎を消せないからだ。

「ミュシア！光の精のラミカを呼んでくれ！！それも今すぐに！」
ミュシアは目を覚ますと、セシルの言うとおりに呪文を唱えた。
悪しき者は決してこの光の力に打ち勝つことが出来ない。そこで、
双頭の大蛇をこの光の力によって二階に足止めすると、一階にある
部屋のひとつから、先ほどエノラが角燈を渡した使用人の娘がでて
きた。

「あなた方がお探しのものは、これでございますよう」
そうして美しい硝子細工の角燈を、ミュシアに向かって彼女は差
しだした。

「わたしたちはずっと本当の光が訪れるのを待っていたんです。ヤ
スミンカさまはこの屋敷で火事のあった日に、顔に大火傷を負っ
て縁談が破談になったのでございますよ。とても美しい方でした
が、弱視でしたので、自分が本当はどのくらいお美しいのかはご存
知ないまま……首を吊って自殺されたのです。侍女のエノラはこの
角燈を持ってお嬢さまの寝室を覗いた時に、そのご遺体を発見して
しまい、その後ほとんど廃人のような人生を送って死にました。あ
の時に火事で死んだ使用人たちはみな、わたしを含め、何故かみな
ここへ呪いの杭に刺されるみたいに留め置かれることになったんで
す。でも今、これでようやく、どこかはわかりませんが、別の場所
へ行くことが出来そうです。唯一の本当の光、これさえ道標になっ
てくれたなら……」

『れおのら〜ッ。使用人ノ分際デ、主人ノコトヲぺちやくちや喋ル
ナンテ許サナイ〜ッ。オマエナンカ、クズダツ、ゴミダツ。天国ニ
ナンカイケツコナインダツ！！死ネ死ネ死ネ死ネ、ミンナ死ネッ！
！モウ嫌ダア〜ッ！！コンナノ嫌ナノオ〜ッ！！コンナハズジャナ
カッタツ！！ミンナ間違ッテル！！ワタシ以外ハミンナ間違ッテル
ンダア〜ッ！！』

「早く、この角燈を持ってお逃げください。あのままでは、ヤスミ
ンカお嬢さまも侍女のエノラも結局不幸なままなのです。そして、
その角燈を持って安全な場所へ出るまでの間、かわりにあの光をわ

たしたちに与えてほしいのです。そのあとで、その角燈を粉々に砕いてください。いいですね？」

「センルとミュシアとシンクノアは、言われたとおりにした。時刻はまだ<十二アザルの刻>と<？（ハゼル）の刻>の間で、まだまだ闇が色濃く、もしその角燈の光がなければ、とても旅籠の<月と牝牛亭>までは戻れなかつたろう。」

屋敷を出て、坂道を下っていく間、ミュシアとシンクノアとセンルは、城館の使用人と思しき何人もの人々にお辞儀をされた。麦わら帽子をちよつと外して礼をする若者や、はにかみながら手を振る若い娘や、鍬を肩にかついだ中年の男や……たくさんの人々が光の精霊ラミカの見える方角へ、擦れ違いざまに登っていった。

「なあ、センル。あれって……」

「今はまだ何も言うな」と、センルは疲れた声音でシンクノアに言った。

「言いたいことがあれば、夜明けまで待て。下手なことを言うとその言霊に引かれて邪霊どもがやって来るとも限らんから」

<月と牝牛亭>では、まだ一階の酒場に客が数人残っており、店の主人も起きていた。三人は、一体この人たちが幽霊でないなどという保証はどこにあるのだろう……といった思いで、部屋に戻ると、夜が完全に明けきるのを待ってから、角燈を粉々にした。

「センルってさ、闇の魔導士とか相手にする時って、あんなのとはつかり戦ってきたわけ？」

「ああ、まあな」と、センルは眉間のあたりを手指でもみながら答えた。どうにも眠くて仕方がない。「ああいう、恨みやつらみがひねくれ曲がって増大したタイプの霊っていうのは、どうにも厄介だな。大抵はそこにつけこまれて闇の魔導士連中に利用されるっていうパターンが多い……が、まあ、片付けても片付けても似たようなケースってのは次から次に現われるから、流石に九年もやればもう十分だろうって話だな」

「うげっ！！九年か）。俺、あんな連中、次にもう一度会うのもこ

めんだぜ」

「でももし、あそこに捕われていた人々の魂が救われたのなら……
わたしはそれだけでも、良かったような気がするんです」

そう言っつて、ミュシアは角燈が朝日にきらめく先の、丘の上にある石造りの城館が元あった場所を眺めやった。今はそこには、土台を残した以外、その上の建物は何もなくなっている。三人は、ほとんど夕暮れか宵の口かという逢魔ヶ時にシロンの町へやって来たので、丘の上にある城館のことなど、きちんと見てはいなかったのだ。

なんにしても、こうした形で三人は次から次へ事件に巻き込まれることとなり、何もシンクノアだけが疫病神として災いと呼ばれるばかりではないらしいということが、だんだんにはつきりしてきた。

むしろミュシアが善意として良いことをしようとした結果として、何かのトラブルを招くといったケースも多く、結局王都カーデイルへは、ルドミラの町を出発して三か月が過ぎた第12（アザル）の月にようやく到着したと、そうだった次第だったわけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4576z/>

聖竜の姫巫女？

2011年12月19日01時54分発行